

---

# 春眠

海土龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春眠

### 【ZPDF】

Z6626D

### 【作者名】

海士龍

### 【あらすじ】

『寒椿』から数ヶ月後、ゆずると久々コンビは中学3年生になつた。今回の依頼は、ゆずるの異母妹である優香からの依頼。なんでも、友達が一週間も眠り続けているのだといつ。

## 1・誰かの陰謀といしか思えん！（前書き）

『寒椿』（<http://ncode.syosetu.com/>）  
n5907d-）の続編です。

## 1・誰かの陰謀としか思えん！

サークスが来たよ

陽気な音楽、楽しい曲芸

笑い 笑い 笑い

ハラハラ、ドキドキ、思わず息を呑む

拍手 拍手 拍手

サークスは夢

夢の世界

永遠の夢さ

疲れる現実から抜け出そう  
現実なんて忘れてしまえばいい  
捨てちゃえよ

ほら、なんて、楽しいんだ

白塗りの顔、だぶだぶ衣装、おもちゃのハッパを吹き鳴らせ

ブー  
ブー

今日もピーハロは、笑ってる

「またかよー」

掲示板を前にして、少年はしゃがみ込んだ。

「小一から中三まで、九回もクラス替えがあつたつていうのに、俺は一度も数と同じクラスになったことがない！ こ・れ・は、誰かの陰謀としか思えん！」

少年こと、大伴直久は、この春、中学3年生となつた。去年から急激に伸びだした身長は、現在、167cm。まだまだ伸びる予定である。

声も幾分か低くなり、美少年とは口が裂けても言えないが、それなりに整えられた顔も、年齢に応じて大人びてきている。……とはいえ、その行動には、まだまだ幼さが溢れていた。

立ち上がる気力なく、その場に頭を抱えていると、自分そつくりの顔が覗き込んできた。

直久同様の成長を遂げている彼の双子の弟

数久である。

「陰謀？ オーバーだなあ」

兄に比べ、おつとりとした口調のためか、大人びてているように見える。が、けしてそんなことはない。

むしろ、数久の方が質の悪いガキだといふことは、付き合いが長い程たつぱりと身に染みて分かることになるだらう。

「数とゆずるは、また同じクラスじゃんか。つーか、違うクラスになつたことないんじゃねえ？」

ゆずるというのは、双子たちのいとこのことだ。彼らの母親が、ゆずるの父親の妹なのである。

「うん。僕とゆずるは、毎年、同じクラスにして貰えるように、校長先生にお願いしているからね」

「はあ？」

当然の事のようにサラリと話すので、危うく聞き逃すところであった。

「お願いしてる、つて……。それ、インチキつて、言わねえ？ つか、だつたら、なんで俺も同じクラスしてくれ、つて頼んでくれないんだよ？」

「えー、だつてえー。直ちゃんまで同じクラスだつたら、忘れ物をした時の貸し借りができないじゃない。しかも、よく忘れ物するの、直ちゃんの方だからねっ」

「けどさー。なにも俺らだけで貸し借りしなくともさ。他のクラスにも友達いるし、そいつらに借りればいいじゃんか」

「なんで? 他の人に頼らなくたって、僕が貸すつて言つてるんだからいいじゃない。それとも何? 直ちゃんは僕に物を借りるの嫌?」

「嫌、つーか……」

雲行きがおかしくなってきた。直久は言葉を詰まらせる。こんな風に、自分の言いたい事もろくに言えず、相手にうまくかわされてしまうのは、大抵、直久の方だつた。

ちつ、またか……と、心の中では舌打ちする。

だが、何だかんだ言つても直久は、この、しつかり者で頭の良い片割れのことが自分のこと以上に大好きだつた。

直久にとつて数久は、生まれる前からずつと一緒にいた存在で、誰よりも自分の近くにいて、誰よりも自分を理解してくれる『もう一人の自分』だつた。

例え、世界中の人という人が自分の敵となつてしまつた時でも、最後の最後まで味方でいてくれるのは、きっと数久だとさえ、直久は思う。

双子と言つても、二卵性双生児なら、偶々同時に生まれてしまつた兄弟姉妹だが、直久と数久は一卵性双生児だ。

元は一人の人間として生まれてくるはずであつたモノが二つに分かれ、二人の人間として生まれてきてしまつた。そのことを思うと直久は、どうしても数久を自分的一部かのようにはつてしまつた。数久が嬉しい時、自分も嬉しい。数久が悲しい時、自分も悲しい。

この程度なら許されるだろう。だが……。

自分がこう思つているのだから、絶対、数久もこう思つてい

るはずだ。

自分は今とても楽しい。だから、数久も楽しんでいるに違いない。そう思い始めた時、直久は数久という人格を無視していることになる。

数久は自分とは違う人格を持った一人の人間なのだと言つことを、完全に頭から消し去つてしまつてしているのだ。

一つの受精卵が二つになった。その時から、一人は一人になり、けして再び一人に戻ることはないのだと、直久は最近になつてようやく理解した。

数久は自分ではない。自分とは違う。

離れていく距離は、日に日に大きくなつていくけれど、それでいいのだ。

いつまでも一緒にいたいけれど、自分ともう一人との境界線があやふやな状態でずっと一緒に居続けていいものではない。自分は自分。

最後は自分一人で死の扉を開けなくてはいけないのだから、離れていく距離がどんなに寂しかろうと、それを縮めようとしてどちらかが、あるいは両方が無理をするようなことがあつてはならない。

そう、直久は悟つたのだ。

けたたましく予鈴が鳴り響いた。鞄を持ち直した数久は、それじやあ、と言つて、自分の教室に行こうとする。

「ホームルームが終わつたら、ここでね。一緒に帰ろうよ」

「あー、うん」

そんな、気の抜けた返事を聞くと、数久は背を向けて直久から遠ざかつて行つた。

この日は、今年度最初の学校ということで、授業があるわけでも

なく、ただクラス分けが発表され、始業式に出て、ホームルームを終えたら、それでおしまいだった。

4つある3年のクラスの中で、直久のクラスがどこよりも早くホームルームを終える。

ホームルームの長さは担任の性格の違いなのだろう。

直久の担任は若い体育教師だった。見かけは美人だが、キビキビとした性格と口の悪さで、生徒たちには怖いと評判だ。

実際、怒ると尻尾を巻いて逃げ出しちゃうる程、怖い。だが、余計なことをダラダラと話さないし、表情の違いがはつきりと分かるところは、他の教師たちよりよほど良いと思う。

内容がない話を長々とされることほど、泣きたくなるものはないだろう。

良い担任に恵まれたことを感謝して、直久は教室を出た。

この学校では、3年生の教室は4階にある。ちなみに、2年が3階で、1年は1階、2階は職員室や事務室等がある。校舎は『口』の字形で、4階建てだ。

3年生を4階の教室にしたのは、おそらく部活引退後の運動不足を少しでも解消させてやろうという学校側の心遣いなのだろう。

だが、受験勉強疲れの3年生に少しでも体力を消耗させないようにしてあげようという心遣いはないのだろうか？

そんな不平もちらほら聞こえる中、それでも直久は、眺めの良い3年の教室を気に入っている。

普段と視線の位置が違うってだけで、楽しくなつてしまつ性分なのだ。

しゃがみ込んで見上げるのもいいが、やはり、高いところから見下ろす景色の方がおもしろい。

視野が広くなつて、どんな悩みも一瞬で解決できるような気になるからだ。

今朝、数久と別れた掲示板の前に行くと、直久はそれに目を向けた。朝見た時と変わらない内容にそつと息を吐き、ふらふらと窓辺

に歩み寄つて外を見下ろした。

悪戯好きな春風が草木を弄び、花びらをむしり取つてゐる。どんなに必死に抗つても、風相手に花びらはひたすら翻弄されてしまつ。

空高く吹き飛ばされた桜の花びらが直久の元まで流されてきて、踊れるだけ踊られ、散々弄ばれた後、地面に放り捨てられた。

どうして、花がきれいに咲く時期に限つて風が強いのだろう。夏場の蒸し暑い時にこそ、この風が欲しいのに。

なにも一年に一度の見せ場を邪魔することないじゃないか。

3月の終わりに咲き始め、4月の初め頃にはもう半ば散つてしまつてゐる。

早い木には緑色のものさえ見える。地面に広がる白い絨毯は数ミリの厚さを持ち、踏みつけられ薄汚れている。咲き始めて、あつとう間に散つてしまつて、彼女たちに魅せられ、直久は回りの音さえ忘れ、目で追い続けた。

どのくらいの時間が経つただろう。開いた窓から一枚の花びらが舞い込んできた。

白いドレスを着たあどけない少女を受け止めようと、直久は手を伸ばす。

彼女は、ひらりひらりと直久の手から逃れると、くるりくるりと舞いながら床に降り立つた。

尚、手を伸ばそうとすると、どこからか風が吹き抜け、彼女は再び舞い上がつた。逃げていく彼女を追つて、直久は顔を上げる。すると、桜の花びらの向こう側に、呆れた顔が見えた。

「何やつてんだよ」

ガリガリというわけではないが、この年齢の少年にしては細身で、どことなく頼りない印象のあるこの人物は、直久のいとこのゆずるである。

ゆずるが頼りないというのは、もちろん、性格など内面的なことではなく、見かけの話である。

茎の細い花のような、強い風で折れてしまいそうなイメージの話だ、あくまでも！

「あんまり、桜の花を見んなよ」

「なんで？ そんなの俺の勝手じゃん」

花びらを追い回していたのを見られたのだと知つて、直久は照れ隠しにわざとつっけんどんに言い返した。

すると、ゆずるの方も短く言い捨てた。

「取り憑かれても知らねえよ」

「取り憑かれる？」

「春は、そういうのが多いんだよ」

「そういうの？」

「気が弛んでいるから、つけ込まれやすいんだ」

「つけ込まれる？ 何に？」

聞き返してばかりいると、次第に、ゆずるの機嫌が悪くなつていつのが分かつた。

「魔物にだよ」「魔物にだよ」

魔物……。現実離れした単語に直久は言葉を失う。

そうなのだ。このいとこ、いやいや、我が家系の内では、こういう現実離れした単語が、余裕で日常会話に登場してくるのだ。

なぜかと言うと、うちの家系は代々靈能力　と言つて良いものか、とにかくスゴイ力を持つた者たちが頻繁に生まれる家系だからだ。

1000年とちょっと前、大伴泰成という人物が妖狼との間に子どもをつくったことが、事の発端らしい。

なんでも彼は、当時大活躍していた陰陽師安倍晴明に対抗するために、強力な式神を探していたんだと。

そして、銀色の雌狼と出会つたのだが。

本当かよつ、とツツ口ミを入れたくなる話なのだが、彼はその妖狼との間に女の子を儲けたらしい。

その女の子　小夜こそが俺たちの祖先なのだ。

そんなわけで、妖怪の血を少なからず受け継いでいる我が家系には、妙な力を持つた奴が多い。

中でも、ゆずるは小夜の直径の子孫だから、計り知れない力の持ち主だとか。その気になれば都市の一つや二つ軽く破壊できるらしい……マジでえ？

「」の生きる最終兵器 九堂ゆずるは、床に落ちた花びらを拾い上げると窓の外に放つた。

白く細い指から放られた花びらは、ヒラヒラと風に乗って、どこかに消えてしまった。

直久の視線に気が付いて、ゆずるが振り向いた。形の良い眉を寄せる。

「見んなつて、言つただろ」

「んなの無理だつて。だつて春だし。そいら中、桜ばつかだぜ」「さつきみたいに、じつと見るなつて言つているんだ。お前、魅入つていた。取り憑かれる一步前だつた」

声を荒げるゆずるに、直久は両手を広げて降参のポーズをとる。すると、ゆずるはそれ以上何も言わなくなるのだ。

これは、つい最近知ったゆずるとうまく付き合つていく方法の一つだ。

それまで、いとこだというのに、ゆずると直久は何となく気が合わなくて、お互に避けっていたところがあった。いとこだし、同じ中学校に通い、学年も同じとくれば、嫌でも顔ぐらい合わせることになつてしまふのだが、それでも極力会わないようにしていたのだ。

それが、ついこの前の春休み、数久を加えて3人で出かけたことによつて、二人の距離は究極に縮まつた。

会えば言葉を交わすよつになつたし、一緒にいる時間が前より苦にならなくなつていた。

「けどさ、せつかく咲いてんだから、見てやらないと可哀想じやん」「可哀想？ 僕、あんまり、桜、好きじやない」

「へ？ なんで？」

日本人は桜が好きだ。好きと言つか、特別なものだと思っている。

他の花が咲いても、何とも言わいくせに、桜が咲くとやたら騒ぐのだ。

そんな典型的日本人である直久には、桜が嫌いだと言つたゆづるの気持ちが分からなかつた。

ゆづるは窓に背を向けると、壁に寄り掛かつた。直久と並ぶと、ゆづるの方が頭半分ほど、背が低い。

それを悔しがつてゐるゆづるは、めつたに直久と並んで立つことがないのだが、この時はそのことを失念していたらしい。

「俺、小さいころ、桜の木の魔物に襲われたことがあるんだ。数や鈴加さん、他にも何人かの親戚の子どもと遊んでいた時だつた」

鈴加というのは、直久と数久の4歳年上の姉だ。ゆづるは悔しさを吐き捨てるように続けた。

「根もとに白い手が現れて、俺の足を掴んだんだ。土の中に引きずり込まれそうになつた。鈴加さんが助けてくれなかつたら、どうなつていたか」

「そん時、俺もいた？」

「いねえーよ。いるわけないだろ。お前、俺と遊ぶの嫌がつてたじやんか」

「そつか

ゆづるが嫌いなだけじゃなく、直久は本家に遊びにいくことや嫌いだつた。

年末年始と特別に用がある時以外、本家に近寄らないよつとしていた。

「それに、桜ばかり騒ぐから、他の花が震む。桜なんかより綺麗な花は、いくらでもあるのにさ。だいたい、数多ければイイみたいに咲くし、散つた後は汚いし、夏場は毛虫がわんさかいるし。桜のどこがいいんだ？」

聞かせて貰いたいと、直久を睨め付ける。そのまま受け取って、直久は肩をすくめた。

「確かに、そうかもしないけどさあー。散る瞬間は、どの花よりも綺麗だと思つぜ。ほら、見ろよ。なんか、雪みたいじゃん」「馬鹿つ。見んなつて！」

再び窓の外に向いた直久の目を、ゆずるは慌てて塞ぐ。そのあまりの慌てぶりに直久は吹き出してしまつ。

「お前、桜が嫌いなんじやなくて、怖いんだろ？」「なつ？」

真つ赤に染まつた顔を見る限り、図星らしい。

まあ、実際に魔物に襲われた身としては、怖くなつてしまつても仕方がないか。

直久が、してやつたり、ヒータータ笑つていると、無言で拳が飛んできた。

直久は、反射神経だけは自信がある。それをひょいと避けて、舌を出すと、ようやくやつて来た待ち人の背に逃げ込んだ。

突然盾にされた数久はどうしたの？と直久に振り向き、それから、ゆずるの顔を伺つた。

ゆずるの顔で、だいたいの一人の間の空氣を読むと、それを打ち破る笑顔を浮かべて、

「お待たせ、二人とも。さあ、帰ろうね。一緒に！」  
と言い放つた。

一緒に、という言葉がやたら強調されて聞こえたのは、たぶん、ゆずるや直久だけではなかつたはずだ。

たちまち空氣の流れを変えられてしまい、振り上げた拳を下げるしかないゆずると、逃げる氣力も奪われた直久は素直に数久に従うしかない。

ゆずるがどんなに桜を怖がるつと、一番恐るべきものは、この力ズスマイルなのではないかと思つ直久だった。

## 1・誰かの陰謀としか思えん！（後書き）

『董狩り』（<http://ncode.syosetu.com/n6689d/>）へ続く。

## 2・ちやんと説明をプリーズ！

二人の数歩前を、黙つて歩いていたゆずるの足が止まつたのは、昇降口を出ですぐだつた。

同じクラスのくせに、どうしてゆずるより遅いのだと、数久に問い合わせていた直久は、危うくその背中にぶつかりそうになる。

「なんだよつ。急に立ち止まるなよ」

ギロリと睨んでやるが、当のゆずるは直久の方をちつとも見てくれない。

に、に、睨み撲？

嫌味も相手に通じなければ意味がないよつに、睨んでも相手が見てくれなければ、なんの効果もない。

諦めて、ゆずるが見つめている先に目を向ける。すると、校門の所に、ちんまりと座り込む女の子の姿が見て取れた。ふわふわとした感じの可愛い子で、どこぞの危ないオヤジに見つかつたら、そのまま横抱きにされて、かつ攫われそうなカンジである。

どこかで見た覚えがあるぞ、と小首を傾げた時、隣から小さい声が聞こえてきた。

「優香ちゃんだ」

「ゆうかちやん？」

顔を横に向けると、数久が頷いた。

「ほら、ゆずるの妹だよ。会つたことあるでしょ？」

「あつたつけ？」

めつたに本家に行かない直久は親戚関係に疎い。おじおばレベルでさえ、あやふやなのである。

そんな直久を情けないと思つだらうか？

だが、それも本家九堂家と、その分家である大伴家の家系図を見れば仕方がないことだと分かつてくれると思つ。ハツキリ言つて、

綱目なのである。

いとこ同士の結婚が非常に多い為、あらゆるところで横に一重線が走り、縦線を見難くしているのである。

誰が誰の親だつて？ 誰と誰が兄姉弟妹で、誰と誰が夫婦なんだ？ ああ？ ……と、まあ、ややこしいこと、この上ないのだ。

おそらく、例の妙な力をより強く保とつとしているせいなのだろう。特に本家は、いとこ同士でしか結婚しないことになつてゐるらしい。

実際、ゆずるの祖父母も両親もいとこ同士だし、過去にいとこを妻にしていない当主は存在しない。

ゆずる自身もそのうち、いとこの中から妻を選ぶことになるんだらうつな。

直久は、ぼんやりとそんなことを考えた。

ゆずるにとつて、いとこと言えば、父親の妹の娘である鈴加と、母親の妹の娘が2人と、同じく母親の弟の娘が1人いる。その4人の中から選ぶのだろう。

直久の脳裏に一人の少女の顔が浮かぶ。

愛羅というその少女は、直久たちより一学年下だが、同じ学校に通つゆずるの従妹だ。確か、ゆずるの母親の弟の娘だ。年も一番近いし、何より愛羅自身が乗り気なのである。

会う度にゆずるに対してもラブ光線を放出している様子は、端から見て痛いほどであった。

ちなみに、愛羅の母親は、俺たちの父親の妹であるから、俺にとつても従妹だつたりする。

ほらほら、ややこしくなつてきただろ？

さてさて、話は戻つて……。

直久は優香のことを思いだそつと、ゆずるの後に付いてゆつくりと優香に歩み寄つた。

優香の名前をゆずるが呼ぶと、俯いていた顔が跳ねるように前を見た。そして、ゆずるの姿を認め、ぱあつ、とその顔を輝かせた。

「ゆずる兄さまー！」

ゆずるの腰までもない背丈の幼い少女が、両手を広げて駆け寄ってきた。

その身体を受け止めると、しづらぐ、ぎゅうっと抱き締めてから引き離し、片膝を付いて、ゆずるは妹と田線の高さを同じにする。

「いったい、どうして、こんな所に？」

「どうしても、ゆずる兄さまに」相談したいことがあったの

そう言つた優香のうるうるした瞳が、ゆずるの背後にいる双子たちをよじやく映した。

あつ、と小ちく声を漏らすと、深々とお辞儀をする。

「こんなちは、直兄さま、数兄さま」

この、やたら礼儀正しい挨拶に、直久は額を抑えた。

思い出した！思い出したあ！

6歳のガキとは思えない礼儀作法。丁寧な口調。いかにもお嬢様っぽい雰囲気。

正月、本家でよく田にする子どもだと、直久は認識した。これで優香もめでたく、直久の、顔と名前一致する親類リストに仲間入りしたわけだ。

「こんなちは、優香ちゃん。ゆずるへの相談は、僕たちがいたら邪魔になる？」

「うんん。直兄さまも数兄さまも、ぜひ聞いてほしいの」

優香の必死の様子に、ゆずるは首を傾げる。

「大切なことなら、ここじゃなくて本家に来てくれば良かつたのに。その方がゆっくり聞けるよ」

「急ぐ話なの。だから、少しでも早くゆずる兄さまに会いたくて。

「めんなさい、学校まで押し掛けちゃって」

自分が学校まで来てしまつたことが、ゆずるにとつて迷惑だつたのだと思つたらしく、優香はしょんぼりとする。だが、すぐに、そうじやないと首を振られて、笑顔を取り戻した。

優香は自分の兄のことを両親よりも、誰よりも慕つていた。

きれいな容姿も自慢のタネだったが、九堂家の次期当主として九堂家が所有する神社の祭儀を取り仕切る姿は、『かつこいい』以外の言葉では言い表せなかつた。

それは普通の兄妹ではないからこそ、よりいつそう強まる想いだつた。

ゆずると優香は兄妹と言うが、異父兄妹だ。

ゆずるの父親は九堂家の長男で、ゆずるの以前に次代様と呼ばれていた人物だ。

だが、彼は、ゆずるの母親との婚約が決められていた時からすでに、別に想う女性がいて、妻が子を身籠もつたと知るや否や、その女と家を出て行つてしまつたのだ。

身重の妻に離婚届だけを残して、九堂家を出て行つてしまつた彼は、当然、次代としての資格を失い、一度と九堂家並びにその分家の敷居を跨ぐことを禁じられた。

直久はこの話をつい最近、数久の口から聞いた。

「浩一伯父さんにとって、自分に代わる跡取りがいれば、自分が家を出でていっても文句ないだら……みたいな感じだつたんだと思うよ」数久は淡々と語つてみせたが、その中に隠しきれない怒りの感情が直久にまで届いてきたのを覚えている。

ゆずるの父親 浩一伯父さんは、結婚後、わずか4ヶ月で離婚届を妻に突き付けた。これほどまでの仕打ちを受けても、ゆずるの母親は何も言わない人だつた。

彼女は、言われるままに結婚し、ゆずるを身籠もり、離婚に応じたのである。

離婚後、それでも彼女は、ゆずるの母親であり続けようとしていた。そのため、離婚当時20歳だった彼女は、両親や、ゆずるの祖父母が勧める再婚の話に頑として首を縊に振ろうとしなかつたのである。

この先の生涯を一人で生きていくと固く決めていた彼女を説得し、再婚させたのは、8歳のゆずるだつた。

相手は、九堂家当主が選んだ人で、直久たちの父親の弟にあたる人物だった。またもや言いなりの結婚だったが、今度のものは彼女を幸せにしてくれたらしく、まもなく両親共に望まれた子どもが生まれた。

それが優香だ。

ゆずるの妹と言え、優香は本家の子どもではないので、本家で暮らすゆずるとは別の家で暮らしている。

一人が会うのは、どちらかがどちらかに会いに行つた時か、もしくは祭儀の時など特別な時のみだ。

わざわざ会いに行つた時はともかく、祭儀の時の一人の距離は家と家の距離よりも遠く感じ、優香はゆずるのしゃんと伸びた背中しか見ることが叶わなかつた。

兄は次代様、自分は単なる分家の子ども。

家と家の距離よりも、年の差よりも、その違いは果てしなく大きいのだ。そんな遠い兄を優香がどんなに憧れに想つてゐるか、その瞳を見れば瞬時に分かることだらう。

対して、ゆずるは、自分の動作一つで一喜一憂してしまう妹を可愛がつてはいるが、どこか苦手に思つてゐるようだつた。

彼女が無邪気に笑えば、つられて笑顔を見せるが、それも次第に引き攣つたものになつてしまふのだ。

優香が無条件で慕つてくれればくれるだけ、ゆずるは苦しそうな顔をする。

それが何故なのか、この時の直久には分からなかつた。ただ、この時も、ゆずるが苦笑を漏らしながら優香の頭をゆっくりと撫でているのを、じつと黙つて見つめていた。

「それで、急ぐ話つて？」

優香の気持ちが落ち着くまでの時間を十分にとつてから、ゆずるは訊いた。

「実は、ゆうかのお友達がずっと眠つたままなの」

「眠つたまま？」

「うん。りえちゃんつていうんだけじ、ゆづかの幼稚園からのお友達なの」

「ああ、莉恵ちゃんね。俺も何度か会ったことある子だよね?」

「うん、そう。それでね。明日、ゆうか、小学校に入学するでしょ? りえちゃんも一緒に入学するの。でも、りえちゃん、寝つたままで起きてくれないの」

「起きてくれない?」

ゆづるは話が見えないと、眉を寄せた。

優香は明日、小学校に入学することになつてゐる。直久やゆづるたちも6年間通つた小学校だ。

大好きな兄が通つていた学校に通うのは、優香にとつて、とても楽しみなことで、2ヶ月も前から、入学式の日時を何度も聞かされていたゆづるは、そのことをよく知つてゐる。

一緒に入学するのだという友達のことも数人聞かされていて、莉恵という子もそのうちの一人だ。

だが、その子が眠つたまま目覚めないとは、いつた「ううう」となのだろう?

「優香、もう少し詳しく話してくれ」

真剣な顔を見せた兄に、優香はコクンと頷いた。

「あのね、ゆうかも今日知つたことなの。明日、一緒に小学校に行こうつて、お電話したの。そしたら、りえちゃんのママが、りえちゃんは病気だから行けないって言つたの。風邪?つて聞いたら、違うつて……。どうしたの?つて聞いたら、分からないつて。おつきい病院に行つても、お医者さんはどこも悪くないつて言つて、帰されちゃつたんだって。けどね、りえちゃん、一週間も眠つたままなの」

「一週間も?」

驚いた顔で、ゆづるは数久を振り返つた。その目を受け止めて数久は頷く。

数久も優香の前で膝を折ると、彼女の肩に手をそつと置いた。

「りえちゃんは一週間も眠つたままなの？」

数久の優しい問いに、優香は首を縦に振る。

「優香ちゃんは、りえちゃんに会つた？」

「うん。お見舞いに行つたんだけど、どうしても、りえちゃんの家に入れなかつたの」

「どうして？」

「なんだか、とっても怖くて……」

うるうるした瞳から、今にも大粒の涙がこぼれ落ちそうになる。数久は優香の肩を2度ほど優しく叩くと、大丈夫だと繰り返した。

「ゆずる」

「ああ」

ゆずると数久は頷き合つ。その、一人だけが通じ合つちやつてます……という雰囲気に直久は憤慨する。

「どうこうことだよつ！ちゃんと説明を、プリーズ！」

ぎやあ、ぎやあ、と騒ぎまくる直久に、ゆずるは眉をひそめた。

「つるさいな、お前は！」

「だつてさ、俺だけ蚊帳の外でさー、一人だけで分かつちやつてますつてえーの、なんか、すつごい悔しいじやんか。俺だつて、仲間に入れて欲しいじやんか。そりやあ、俺は〇能力者だけどさー。一応、俺も優香ちゃんにとつて従兄なわけだし……」

「そうなのだ。

都市の一つや二つぶつ壊せるほど力を持つてゐるゆずるの従弟である俺は、なぜか、全くそういう力を持たずに生まれてしまつたらしい。

ゆずるの父親である浩一さんにとつて、直久たちの母親である彰子が唯一の妹であり、その息子たちは、分家のの中でも本家筋により近い者ということになる。

例の妙な力は本家が一番で、そこに近い血筋ほど強いとされてい  
るから、当然、直久は強い力を持つて生まれてくるはずだったのだ。

ところが、全くの〇！　靈一つ見えない眼を持つて生まれてきてしまった。

これが、直久が本家に近寄らない理由の一つでもあった。

親類の者たちは、きっと双子の弟に全ての力を取られて生まれてきてしまったのね、と哀れみの目を向けてくるだろうし。その、まるで欠陥品を見るような目が、嫌で、嫌で、堪らなかつた。

今だから認める」とだが、自分が今まで九堂家の力や歴史について興味ないよう振る舞つていたのは、そんな目から逃れるためだつた。

どんなに哀れみの目を向けられようと、自分はそんなこと、ちつとも気にしていないんだという態度を取りたかつたのだ。

だけど、その力の為にゆずるが悪靈たちに狙われたり、苦しんではいる姿を見てしまつたあの時から、九堂家のこと、ゆずることをもつと知りたいと思うようになつていて。

今まで、興味ない、そんなこと知りたくもないと思つていたことだが、今はすこく知りたい。

少しでも多くを知りたいから、自分がだけがのけ者にされるのは、絶対に嫌だ。

そんな直久の気持ちが通じたのか、ゆずるは少し微笑んで、

「魔物が取り憑いた可能性があるんだ」

と、答えてくれた。

「魔物？」

「さつきも言つただろ？　春にはそういうのが多いんだつて。その子に会つて、実際にみてみないと分からぬいけれど、魔魔かもしれないな」

「むま？」

適切な漢字さえも思いつかない直久が首を傾げると、数久が空に指を滑らせて『夢魔』と描いてくれた。

「文字通り、夢に関わる悪魔のことだよ。夢魔はおおぞりぱに2種類に分けられる。夢魔自身と、その夢魔が見せる夢のことを『ナイ

トメア』と言つて、この悪魔が見せる夢は悪夢なんだ。つまり、恐怖を『与える悪魔』

「ナイトメアか。それなら知つてゐるぜ。ゲームとかによく出でてくるからさ。馬面な奴だろ?」

「そう。けどね、分かると思つけど、ナイトは夜。メアは古い英語で靈を意味していたから、ナイトメアは元々『夜の靈』という意味だつたんだ。それが、後世ではメアが牝馬を指す言葉とされるようになつて、絵画とかで、炎に包まれた馬で表現されることが多いなつたんだ。だから、ゲームとかで出でくるナイトメアは馬の姿をしているんだよ。」

「だけど、実際のナイトメアが馬の姿をしているかどうかっていうのは……ちょっとね。僕もまだ会つたことがないから、分からいや。……そして、もう一方はインキュバスまたは、サツキユバスと言つて、この悪魔は淫魔なんだ」

「いんま?」

再び直久が首を傾げたので、数久は空に漢字を書かなければならなかつた。

「淫乱の『淫』で、悪魔の『魔』。分かる?『

「オーケー」

「インキュバスは男性の夢魔で人間の女性を襲い、子どもを生ませる。サツキユバスは女性の夢魔で人間の男性と交わつて精子を集めると言われている」

「うわつ。なんか、数の口から、襲うとか、交わるとか、精子とか言われると、聞いているこつちが照れてしまつじゃんか。ぎやあー、いやあーん。数うつたら!」

「サツキユバスが集めた精子をインキュバスが人間の女性の腹に受精させるらしいんだけど、インキュバスとサツキユバスは同じもので、時として変身して使い分けているのだとも言われているんだ。ともかく、この二つの悪魔はナイトメアと異なつて快楽を『与える夢魔なんだ』

きやあー、快楽だつてえーつ。恥ずかしいー。

「……って、ちゃんと聞いてるのー直ちゃんー」

「も、もちろんだよ、数」

「だったら、そこで、どもるのやめてくれる?」

数久の怒氣溢れる声に、直久はピシッと顔を引き締めて答えた。  
だが、なんと言つても、わずかなエロッちい単語にも反応してしまつお年頃。次第に口元が緩んできてしまつ。

数久は大きく首を横に振ると、ゆるに向き返つた。

「6歳の子どもをインキュバスが狙うとは思えないから、たぶんナイトメアだと思うけど。ちゃんとこの田で見てみないとね」

「そうだな。急いだ方がいいのも確かだ」

悪夢から一刻も早く救つてやりたいと言つて、二人は立ち上がりた。だが、そんな二人の顔を交互に見つめながら直久は、はて、と思う。

「なあ、聞いていい?」

「何?」

答えたのは数久で、ゆるは無言で振り返つた。

「さつきからカタガナを連発しているけどさ。カタガナ名の相手に、お前らの御経もどきつて通用するの?」

「……」

「……」

狩衣姿で印を結んだり、お札を貼つたりしていた数久の姿を思い出しても、直久は二人に大打撃を与えてしまつたようだつた。

### 3・夢の中に入る？

結論。『まあ、なんとかなるだらう』……といつわけで、優香の友達の家に向かうことになつたのだが、その玄関まで来て、ゆづるも数久も優香も、そろつてその歩みを止めてしまつた。

一人平然とした顔でインターフォンを押した直久は、不思議に思つて振り返る。すると、真っ青な3つの顔がそこにあつた。優香は地べたにしゃがみ込み、俯いて胸を押さえている。その横を見ると、数久も膝を着き、苦しそう息を荒くしているし、かろうじて膝を折つていなければ、壁に背中を預けている。

「何なんだ？ お前ら、どうかした？」

「お前こそ。何なんだよ？」

驚いて尋ねると、逆に驚かれ、聞き返されてしまった。

「直ちゃん、あのね」

側に来るようにと手招きされ、直久は数久の脇に跪いた。

「今、この家を中心て、ものすごい妖気が漂つてゐるんだけど……？」

切れ切れに言われた言葉に、直久は首を傾げる。

「へー」

「何も感じない？」

「全然」

さすが直ちゃんだ、と言つて、数久はバッタリと直久の腕の中に倒れた。

本気で気絶したわけではない。双子の兄が、あんまり鈍感なので気が抜けてしまつたらしい。

「数う、おーい、しつかり！」

ペシペシと軽く数久の頬を打つと、直久はゆづるの方に目を向け

た。 ゆずるの額にじつとりと汗が噴き出でている。

「おそらく、一つの場所に魔物が長く居続けていた為に、この場所の気が汚れ、他の魔物まで集まってしまったんだろう。俺たちにとって、この場所は危険だ。家の中は、もつと魔物で溢れているだろうし」

「じゃあ、どうすんだよ！」

家中に入ることができないと言われて、直久は狼狽える。

そんなに強い妖気がここに漂っているのだろうか。自分には全く感じられないだけに、ぞつとする。

だが、家に入らねば、莉恵に会うことができないし、夢魔を祓うこともできない。

どうするんだ?と、今度は答えを求めるように訊くと、ゆずるはゆっくりと口を開いた。

「夢魔が取り憑いていると思われる優香の友達を、本家に移動させて、そこで夢魔を退治する」

「本家に?」

「あの家の周辺には魔を近寄らせない結界が張り巡らされている。その昔、小夜が張った結界だと言われているものだ。それが確かかどうかなんて俺は知らないが、他の場所よりも俺たちにとつて有利な場所だつてことは間違いない」

ゆずるは空に手を泳がせた。何かを見ているようだつたが、それが何であるかは、何も見えていない直久には分からない。

「ここに集まつてきている魔物は、一匹一匹が浮遊霊なんかとは比べものにならないほど扱いづらいヤツらだ。それをこんな数だけ集められる悪魔なら、相当の力を持つたヤツなんだろう」

ゆずるに不安の色が浮かぶ。

普段あんだけ勝ち気で、傲慢な奴にそんな顔されると、そこから目を逸らしたくなる。

直久は、分かつたと短く答えると、玄関の向こう側から近寄つくる人の気配に応える心の準備をした。

大伴泰成が妖狼に生ませたという娘 小夜は、九匹の妖狼を式神として従えていた。そのため、九狼の巫女と呼ばれていたらしい。その『くろう』という音が『くどう』と変わり、『九堂』となり、それが小夜の直系の子孫の名字となつたと言われている。

また、代々の九堂家の当主は九狼様と呼ばれ、小夜が使役していた妖狼を式神に持つ。

九匹の妖狼たちは、それぞれに一つずつ社を持ち、その内の一つを本家が、他の八つを九堂家の分家である大伴家が所有していた。直久の家も妖狼の社を敷地内に持つていて、先見神社と呼ばれている。父親は一応、神主みたいなことをやつていて、直久自身は近所のおばさんたちに『先見神社の子』などと呼ばれていた。

石階段を上ると、やはり石で造られた鳥居が見えてくる。

登つてくる者をさらに高い位置から見下ろすその足下には、『朝霧神社』と彫られていた。その下をくぐると、やたら立派な社が姿を現してくる。

この神社は、一見、ごく普通の神社のように見えた。だが、社を守る狛犬の姿はなく、賽銭箱のような物も置いていない。社の中に鏡などの祭具はいっさい無く、畳を敷かれた八畳ほどの部屋と、その両脇に板張りのだだ広い部屋があるのみだ。

神社の後ろに古い造りの家があつて、社の両脇の部屋とは長い廊下で繋がっている。

この古い日本邸こそがゆずるの暮らす家で、歴代の九堂家当主が生まれ育ち、受け継いできた家なのだ。

一足先に本家に行つたゆずるたちを追つて、直久は莉恵とその両親を連れて本家に向かつた。

本家に近付けば、近付くほど、直久の気が滅入り、頭が痛くなつていつた。

たぶん、精神的なものなのだろうと思つ。

親族たちの嫌な目つき。自分が力を持たずには生まれてしまつたことへの劣等感。

それらが、直久の知らないところで苦しみとなつてゐるのだろう。頭を抱えながら、門をぐぐり、玄関に手を伸ばした。その時。

「痛つ」

伸ばした指先に、針を突き付けられたような痛みを感じて、思わずその手を引っ込んだ。

どうしたのだろう、という不思議そうな眼差しを背中に感じながら、直久はもう一度、手を伸ばした。

バチンッ。

今度は小さな爆発音が直久を拒んだ。

「あの、」

申し訳なさそうな声をかけられて振りかえると、莉恵の母親と曰があつた。その後ろには莉恵を抱く父親の姿がある。

「どうかなさいました？」

なかなかドアを開けようとしない直久を不審がつて、そう尋ねてきた彼女に直久は苦笑した。

「いえ」

次こそはじんに拒まれようと構わない気持ちで、ドアノブに手を伸ばした。だが、直久の手が届く前に、それは血ちがチャリと音を立てて回つた。

「何してんだよ？」

玄関の内側から顔を見せたのは狩衣姿のゆずるだつた。直久に冷ややかな瞳を向けると、その後ろの親子には軽く微笑んで、

「どうぞ上がってください」

と、玄関を広く開いた。

ゆずるが案内した部屋は、畳64枚分の広さを持つ和室で、狩衣

姿の数久と優香が着々と準備を整えていた。部屋の中心には布団が敷いてあり、その枕元にはコップ一杯の水がある。

布団を囲むようにビーハー玉より少し小さい半透明の玉がいくつも並べられてあり、部屋の四方の壁にはお札が貼つてあった。

布団に莉恵を寝かせるように指示を出すと、両親には別室で待つよつに言つ。

優香さえ部屋から追い出してしまつと、ゆずると数久は静に眠っている少女の顔をじつと覗き込んだ。

黙つて見つめることが数分。 ようやく口を開いたのは数久の方だつた。

「思つた通りだつたね」

「ああ」

「思つた通りつて？」

一人だけで納得して終わりにされて堪るかと、つかさず直久は聞き返した。

「靈が取り憑いて昏睡状態になる場合もあるけれど、この子の場合は靈じやない。本当に眠つている、ぐつすりと。夢魔に憑かれているんだ」

「ああ、夢魔ね」

先程聞かされた話を思い出して直久は頷いた。

靈に取り憑かれた場合のパターンは数多くあるらしいけど、大抵は身体を乗つ取られて、本人の意思に反して行動してしまつたり、言葉を話してしまつたりするらしい。

直久が出会つた靈に憑かれた人と言えば、つい数ヶ月前に会つた少女、紫緒さんがいるけれど、彼女の場合もボーッとしてはいたが、目を開けて動いていた。

要するに、靈に憑かれた場合、ずっとじつとしていられないで、フラフラ動くというわけだ。

「夢魔つていうのは、思つた通りだつたけど、その力の強さについて予想外だつたね」

「そんなんにヤバイ相手なのか？」

「ん～～～」

眉をひそめて低く唸る数久に、直久の咽が「ゴクリ」と鳴った。

「ねえ、ゆずるは夢魔を退治したことある？ 僕は初めてなんだけ  
ど」

「俺も初めてだ」

「げつ。マジでえ？」

「すゞく弱い悪魔なら退治したことがある。そん時は聖水ぶつかけ  
たら、あっさり消えてくれたけど、今回のせ、そもそもまくはいか  
ないだろうな」

「そうだよね……」

「うわっ。なんか、めっちゃ不安なんですけど。」

直久はゆずると数久の顔を交互に見つめると、そう言えばと手を  
叩いた。

「じじいは？ じじいに手伝って貰えればいいじゃんか」

「お祖父様に？」

お祖父様と偉そうに言われる人物は、ゆずると双子たちの共通の  
祖父である九堂家の当主だ。彼以上の強い力を持つた者は、おそらく  
存在しないだろう。

名案だと思つたそれに首を振つたのは、ゆずるだった。

「お祖父様はいない。今は京都の方へお出かけにならっていの」

「京都？ なんでまた？」

「毎年この時期になるとお出かけになるんだよ。ほら、春だから

「春だから？」

「魔物がうじやうじや出てくるから、仕事時なんだよ」

「なんだよ、そりゃー。魔物っていうのは、蛇か蛙の一種か何かな  
のかよ？」

「別に魔物は冬眠しないよ。単に、春は人間の方が浮かれてているか  
ら、付け込みやすいんだよ」

「そういうわけで、お祖父様はいらっしゃらない。お祖母様もお前

が来ると言つたら自室に籠もつてしまわれた」

「ばばあは、初めから当てにしてねえよ」

嘘か本当か、イタチの妖怪を父親に持つと言われる祖母は、直久のことをひどく嫌つていた。

それは、単純に相性が合わないからという理由ではないようだが、その本当の理由を直久が知るわけがなかつた。

嫌つていると言つよりも、脅えているような目を会つ度に向けられては、直久もいい気はしない。

いつからか、直久も祖母を嫌うようになり、お互いになるべく避けるようにしていた。が、直久よりも祖母の避け様の方が極端で、誰の目から見ても明らかだ。これも直久を本家から遠ざけた理由の一つだつた。

兄の祖父母に対する口の悪さに苦笑しながら、数久は言い放つた。

「じゃあ、僕たちでやるしかないね」

二人が頷くのを確認して話を進める。

「夢魔は、憑かれている人から引き離し、退治するのがベストなんだけど。今回の場合、夢魔の力が僕たちの手に負えないくらい強すぎるから、追い払うのがせいぜいだと思つ。追い払う、つまり、この子から引き離す方法は読経つていうのもあるけど、たぶんそれは効果がないと思うんだ」

「やっぱり、カタガナ名だからか?」

「そうじゃなくつて。基本的に東洋の妖怪も、西洋の悪魔も、人間が作り出した負の感情だという点で同じものなんだよ。だから、御経でも、聖書の言葉でもどちらでも効果があるんだ」

「でも、言葉が通じないだろ? 日本人の幽靈には日本語で、アメリカ人の幽靈には英語で説得しないと成仏してくれないって聞いた

ぜ」

「どこで?」

「テレビで」

「……」

「……」

「ねえ、ちょっと疑問。アメリカ人の幽霊は成仏するものなの？」

「成仏っていうのは、死んで仏になることだぞ」

「……」

「……」

しばらくの沈黙後、直久のマヌケな声が

「あー、じゃあ、アメリカ人は死んだら何になるんだ?」

と響いたが、誰一人としてそれに答える者はなかつた。

「で、話を戻すけど。今回の夢魔に御経の効果が望めないと言つたのは、そのくらいで追い払えるような弱い相手じゃないからだよ。だから、今回、僕たちが取る方法は莉恵ちゃんの夢の中に入つて、莉恵ちゃんを叩き起しにすつていう方法がいいと思つ」

「夢の中に入る?」

「外からどんなにやつてもダメなら、内からやらなきやつて」と。夢の中にいる莉恵ちゃんに会つて、夢から叩き出すんだよ。夢から覚めちゃえば、夢魔は莉恵ちゃんから出て行くしかないもんね」

「これで万事解決、と言い切つた数久に対して、ゆづるは形の良い眉を歪ませた。

「夢の中で夢魔と鉢合させしたら、簡単にやられてしまうな。夢はヤツらのテリトリーだから。危険極まりない方法だが、それしかない」と言うのなら仕方がない

「それで、どつちが夢の中に入る? それとも一人で?」

ゆづるは、上目遣いで見てくる数久にゆつくりと首を横に振つた。  
「夢の中に他人が入ることで、この子に影響を及ぼすかも知れない。その対処にどちらかがここに残る必要がある。それに、万が一、夢の中で夢魔と遭遇してやられそうになつた時、残つた方が起こしてくれれば逃れることができるかもしない」

「それじゃあ、僕が夢の中に入るから

」

「駄目だ」

ゆずるは数久の言葉を途中で遮った。

「俺が入る」

「えつ、ダメだよ。危険だよ。そんな危ないこと、ゆずるにはさせられないよ」

そこまで言つて、数久は、しまつた、といつ顔になつて慌てて口を閉ざした。

「どういう意味だ？ それは」

「どういうつて？」

「俺が……だからか？」

「違うよ、ゆずるが次代だからじゃないか。次代に何か遭つたら、大変だからだよ」

怒鳴るゆずるを宥める数久。直久はその二人の間に口を挟めずに黙つて様子を見守つていた。

「お前が夢の中で夢魔と遭遇するより、俺が遭遇した方が助かる確率が高い！ お前なんか、一瞬で殺されるぞ。逃げる暇なんかない！」

「そうかもしけないけど、でも、だけど、ゆずるにそんな危険なことをさせたなんて知れたら、僕、お父さんやお母さん、親戚中に怒られちゃうよ。だからさ、今回は大人しく」

「じつと数の帰りを待つていろつてか？ ふざけんな！ 安全なところでのらりくらりとしていて、九堂家の当主になれるかあつ！ 九堂家の当主つてもんは、血族の中でもつとも強くて、頼られるもんだろ？ 僕はもつと強くなりたいんだ。当主に相応しくなりたいんだ。それなのに、安全な場所で腐つてられるか！」

ついに数久が折れたのか、長いため息を一つ付くと、両手を顔の前に広げた。降参のポーズだ。

「でも、一人では行かないで」

「あ？」

まだ苛ついているのか、低い声で聞き返したゆずるに、もう一つため息を付いた。

「直ちゃんを連れて行つてね」

「へ？ 僕？」

「いらない」

唐突に話を振られて慌てる直久だったが、気が付いた時にはすでに、ゆるに拒絕された後だった。

話の流れの速さに付いていけない直久は、数久に救いを求める目を向けたが、説明の言葉を得ることはできなかつた。数久はただニツコリとして、

「だーめ。直ちゃんを連れて行つてくれなきや行かせないと、ゆるに言い放つた。

「直が、何の役に立つんだよ」

「いざつて時に、盾になるとと思つ」

「盾にい？」

疑わしそうなゆづるの目を受けて直久は大声を上げる。

「俺は、人間盾にさえならないんかい！ つーか、つんないもんになりたくないし」

しかし、そんな直久の叫びをちゃんと聞いてくれる者は、一人としていなかつた。

「ああ、あと、盾だけじゃなくて、他にも利用価値があると思うよ。例えば、直ちゃんがケガをすれば僕も同じとこに傷を負うみたいになれば、どんな危険な目にあつてているのか、すぐに分かるし。万が一の時の目を覚まして欲しいつて合図に、直ちゃんを殴つてくれればいいわけだから」

「なんじゃそりやあ～つ

「なるほど……」

ポンつと手を打つゆづるの脇で、直久は畳の上にぶつ倒れた。その隙に、数久は直久の額に何やら文字を描いてしまう。

「はい、できた」

まるで頭に花一輪咲いているような笑顔で言つてくれる。

「直ちゃん、気を付けてね。直ちゃんがケガすると、僕も痛いんだ

からね」「

どうやつ、何か術をかけられてしまつたらしい。

もうこいや、好きにしてくれ。

そんな氣分でのつそりと顔を上げると、皿の前に手の平を突き出される。

「ん?」

見上げると、ゆずるの手だと分かつた。おずおずと手を差し出すと、ゆずるの方から手を握つてきだ。

「行くぞ」

短くそう言つと、ゆずるは莉恵の額にもう一方の手を置き、ゆつくつと瞼を閉じた。

ゆずるの澄んだ声が流れりよつに聞こえてきて、徐々にそれは小さく、小さくなつて、やがて溶けるよつに聞こえなくなつていつた。

#### 4・手、繋いどく？

手を繋ぎ合つて眠つている二人を見て、数久は口元を緩めた。  
近ごろは、前ほどひどくなつたが、目が合つただけ戦闘開始してしまつ一人だ。手を繋いでいるのも珍しければ、一緒に眠つている姿も貴重だつた。

莉恵の額に右手を置き、左手は直久の手を取つて、うつ伏せに眠るゆする。そのまま脇に、右手は腹の上、左手はゆするに握らせて、仰向けて眠る直久。

二人とも繋いだ手の方の肘を曲げていたので、二人の距離はごく短い。もう少しで向かい合つた額と額がぶつかる距離だ。直久の黒々とした前髪と、それより少し茶色いゆするの前髪が絡み合つようになじり合つてゐる。

すうすうと、かすかに聞こえる寝息はどちらのものか、分からなかつた。

「うわつ」

思わず声を上げてしまつた数久は、慌てて口の口を両手で塞いだ。そして、カメラを持つてくるんだつた、と激しく後悔する。だが、さすが直久の双子の片割れ。立ち直りが早い。

しっかりと目に焼き付けとて、後で念じしちやおつ。

そう心の中だけではしゃぐと、一人笑つた。

人の気配を感じて振り向くと、障子に映る小さい影を見つけた。数久が、優香のものだと気付いたのとほぼ同時に、静に声が響いた。

「ゆずる兄さま？」

「優香ちゃん、入つておいで」

「……はい」

予想外の相手が答えたことへの動搖を滲ませた返事が聞こえ、ゆっくりと障子が開いた。

廊下にちょこんと正座した優香を見て、数久は微笑む。

手招きをしてやると、すくと立ち上がり、部屋の中に移動し、

再び正座をして障子を閉めた。

「言い付け通り、鈴加姉さまにお願いしてきました」

「ありがとう」

労うように「コツ」と笑うと、優香も緊張が解けたようにホツと息を付き、笑顔を見せた。

ゆずるが優香をお使いにやっていたのだ。

大した用ではなかつたが、尊敬する兄直々の言い付けだったので、優香は気を張りつめいたらしい。

「鈴加さんは何て言つてた？」

「最初は、絶対無理！つて。だけど、貴樹兄さまが自分も一緒にやるからつて、説得してくれて」

「さすが、貴樹さん！」

姉の鈴加には、莉恵の家に集まつてしまつた魔物の駆除をお願いしたのだが、何分あの量である。姉には荷が重すぎると心配していたのだ。

ただでさえ、あんまり当てにならない人なのに。

力が弱いとか、頼りないとか、そういうことで当てにならないのではなく、力の使い方を大幅に間違つている人なので、当てにならないのである。……と言うより、あまり当てにしたくない人である。

例えるのなら、蟻一匹倒すのにミサイル<sup>5</sup>、6発投下させるような力の使い方をする。

幼いころ、何度殺されかけたことか……。

真夏の夜、蚊がうるさくて眠れないと言つた彼女は、怒りに任せて屋根を数百メートル上空に吹き飛ばしたことがある。彼女が6つの時だ。

当時、2歳だった双子たちは、その爆風により、屋根と共に天高く吹つ飛び、約4時間後、直久は数キロ先の河原で、数久は本家の裏にそびえる山の奥で発見された。

要するに、力の加減ができない人なのである。魔物を祓うついでに、家そのものも払い飛ばしかねない。

数久の胸に不安がよぎる。

もしくは、最初の一匹にいらぬ全力をつき込み、残りの魔物を倒す余力無く、力尽きちゃつたりして。

姉を不安がるのは、何も数久だけではなく、両親も祖父母も同じ思いで、そんな姉には幼い頃からお目付役を付けられていた。貴樹がそれだ。

貴樹は、鈴加たちの父親の妹の息子で、鈴加にとつて、従兄だ。ちなみに、愛羅の兄もある。

二人の年が同じだつたことから、自然に、鈴加のお守りは貴樹、という風になつてしまつたと聞く。

今では、貴樹は、鈴加の実の親より、鈴加の扱いがつまないと評判だ。

あまり、と言つより、全くうれしくない、と彼は肩をすくめるが、まんざらでもない様子が見て取れた。

「貴樹さんが一緒なら、きっと大丈夫だね」

優香に微笑みかけながら、自分自身に言い聞かせるように、数久は言つた。そんな数久を励ますように優香も頷き、そして、ゆづるの方に目を向ける。

「ゆづる兄さま、どうなされたの？」

「莉恵ちゃんの夢の中にお邪魔させてもらつているんだよ。夢の中の莉恵ちゃんに会つて、もう起きなさいつて言つんだ」

「そうしたら、りえちゃんは起きてくれるの？」

「そうだよ」

ホッとした息を吐いた優香を、数久は目を細めて見つめる。そうしてから、刻々と眠る一人に目を移動させた。

今、自分が言つたように簡単に事が進むと良いのだけど……。

数久は優香に気付かれないように、そつとため息をついた。

キィイイン、と耳鳴りがして、直久は我に返る。薄く口を開けると、驚くほど至近距離にゆするの顔があつた。

自分とは違い、太陽の下で元気に運動！……なんてことをしない肌は白く、黒子一つ見あたらない。

長い睫毛が田の下に影を落としている。

繋がった手に田を移した。それに続く手首が、ゆずると自分のでは、えらく太さが違うのだと気付いた。

一回りほどゆずるの方が細い。力を込めたら、簡単に折れてしまいそうだ。

こいつ、ちゃんと肉食つてんのかなあ？

一緒に暮らす相手が70過ぎのじじいとばばあでは、洋食ものは、まずテーブルに出てこないだろ？

ゆずるが、ハンバーガーを食べたことがないと言つて直久を驚かせたのは、つい先日のことだ。

よくよく聞けば、ハンバーガーだけじゃなく、ラーメンやパスタ、お好み焼き、たこ焼きなどといったものも、口にしたことがないらしい。

ある意味、すごい奴だよ。

そう、感心したのを覚えている。ゆずるの瞼がゆつくつと開いた。

何か言いたそうな表情をしたが、開きかけた口を閉じ、じぱりくして再び口を開いた。

「何、見てんだよ？」

不機嫌そうな口調は、どうやら照れ隠しらし。

「うんにゃ、見てたつーか、体が動かないんだけど」

「あ」

そうかと少やく声を上げると、ゆずるは繋いでいた手を離した。

とたん、直久の体が自由になる。

直久はむくりと起きあがり、辺りを見回した。そこは、何処かで見覚えのある場所だつた。

一面に敷き詰められた緑のタイル。高さは低いが、広い机。その机は6つあつて、3つで2列をつくつていた。1つの机ごとに4つの椅子があり、その椅子もまた低く、小さい。

部屋の隅にはオルガンが置いてあり、壁にはとても上手とは言えないような絵が何枚も貼つてあつた。

「なんだ、ここ?」

「幼稚園だ」

「幼稚園?」

「優香たちが通つている幼稚園。俺たちも通つただろ?」

「あー、そう言えば……」

8年ほど前の記憶をたぐり寄せて、直久は頷く。立ち上がり、もう一度ゆっくりと教室の中を見回す。

近付いて、手で触れていくと、何だか懐かしさが溢れてきた。

「直久。あんまりフラフラすんな」

「あ?」

「夢の中は、空間がしつかり保たれていない。数十センチの距離が一瞬で数キロの距離になつてしまつこともある」

もし、そうなつても自分には夢から現実に戻つて来られる自信があるが、直久には無理だろう。

そう、ゆずるは仄めかす。

確かにその通りで、自力で夢から脱出することができない直久は、ゆずるとはぐれてしまつたら莉恵の夢の中に閉じ込められてしまつだろう。

急に不安になつて、ゆずるを振り返つた。

「手、繋いどく?」

「い・や・だ」

「えー。俺、ぜえつたい迷子になつちやうよ」

直久はゆずるのもとに大股で戻ってきて、まだ床に座り込んでいたゆずるに手を差し出した。

「ほお」「

「……」

「手、繋いへ～」

自分的に可愛らしく、小首を傾げて言つてみた。すると、大げさなため息が聞こえて、握り返される。

直久はその手を引き上げて、ゆずるを立ち上がりさせぬと、一瞬と笑つて見せた。

「……気持ち悪い」

「ひつじー。そういうの」と言つと、直ちゃん、傷付いたやうなんだからねつ

「つむれー」

うんざつした顔で短く言い捨てると、直久の手を引いて、ゆずるは歩き出す。

早いとこ莉恵を探し出して、帰りたかった。直久と二人きりという状況はゆずるを疲労させるし、何より、夢魔の存在が危険だ。ゆずるは教室の扉を開けた。引き戸であるそれを横にスライドさせると、外の景色が一人の前に姿を露わになる。

最初に見えたのは、ジャングルジム。続いて、ゾウさん型のすべり台。ブランコ、鉄棒、砂場、と、記憶にある幼稚園の運動場が目に映つた。

隣でホツと息を付いたゆずるの顔を、直久は不思議そうに見る。その視線に気付いて、ゆずるが振り返つた。

「夢の中の空間はおかしいって言つたろ？ あるべき所にあるべき物がないっていうのはよくあることだし、こんな場所にこんな物があるはずないのにあるつていうのも、よくあることだ」

「つまり、教室のドアを開けたら、運動場じゃなくて砂漠が広がつていたかもしれなかつたわけか？」

「砂漠だか、草原だか、それは何か分からぬけどな」

とにかく、現実世界とは、かつてが違う。気を引き締めなければ  
と、ゆずるは咽を鳴らした。

「式神を呼ぶ」

「呼ぶ？ 式神って呼ぶもん？」

式神を使っている様子を実際にしたのは、数久が使っている時、  
一回のみだ。

あの時、数久は印というものを結んで、全身から蒼いオーラのよ  
うなものを放出し、それが次第に大蛇の形を取つたのだ。

数久の式神は『雲居』と言つて、大蛇の妖怪だ。

人型を取ると、超が百万個付く美女なんだよ……と数久は背景を  
ピンク色に染めて言つが、それはあながち嘘じやない。

自分の目で真実を確認した直久も、どことなく悔しいものがある  
が、頷いてやつてもいいと思つている。

それはともかく。数久が雲居をよぶ時、『呼ぶ』と言つより、『  
喚ぶ』だったのを覚えている。

直久の考えを読んで、ゆずるはなるべく丁寧に説明しようつと、眉  
を寄せる。

以前の直久なら、説明する気にはならなかつただろうが、ここ最  
近の彼は少しでも九堂家について知ろうと必死になつてゐるのを、  
ゆずるはちゃんと分かつてゐたのだ。

「式神の所有仕方は人によつて違う。数久の場合、体内に入れてお  
く。体内と言つても、心臓とか、肺とか、胃とか、どことはつきり  
言える場所じゃなくて、全身を取り巻く『気』みたいなものに混ざ  
り合わせておくんだ」

「気？ オーラみたいなもんか？」

「まあ、そんなとこかな」

「じゃあ、体内つーより、体の表面にまとわり付かせているカンジ  
？」

「……そうだな。この所有の仕方をしている者が式神を喚ぶ時、気  
を普段の倍以上に体内から放出する。それを餌にして、式神は元々

の姿を取り戻し、姿を見せるというわけだ」

要するに、使わない時はコンパクトサイズで数の回りを取り巻いているものが、使われるつて時になると、数の気を食つて『ふえるワカメ』みたく体を膨らませ、大蛇の姿になるつてわけだな。

「なんか、それって疲れない？ 喚ぶ度に気を食われるわけだろ？」

「それだけじゃない。実は数久のやり方は一番力を消耗するやり方なんだ。他にも石とか、物体に式神を封じて所有するやり方もある。これも喚ぶ時には大量の気が必要だが、物体に封じてある時の式神は眠っているわけから、本当に喚ぶ時だけ力を消耗する。対して、体内に式神を入れておくのは、靈に憑かれているのと近い状態にある。式神は主と寝起きを共にする。常に眠った状態にある場合と違つて、定期的に食事が必要となる。奴らの食料は人の生氣なわけだから、食事の時間の度に、数は式神に気を与えなければならな

い」

「なんで、数はそんな疲れる方法を取つてるんだ？」

石とかに封じちゃえればいいのに。

そりやあ、その石を忘れちゃつたりしたら大変だけど。……俺なんかは忘れちゃいそうだけど、数なら大丈夫だろうし。

首を傾げた直久に、ゆづるは続けて話した。

「それに体内に入るやり方よりも、物体に封じて持ち歩いた方が複数の式神を所有できる。だから、物体に封じるやり方を取つている者が多い。お前の姉さんもそうだろ？」

「鈴加も？」

そう言えば、怒った鈴加にビー玉を投げつけられたことがある。そのビー玉は直久の頭に当たるや否や、突然、発火したのだ。

近くにいた貴樹が慌ててカードのような物を放つたら、そこから大量の水が出てきて直久は焼け死ぬことを免れたわけだが、みつともなく焦げた髪を母親に剃られて、しばらく屈辱の坊主頭になってしまったのを覚えている。

「つーことは、貴樹もそつなんだ」

「カードに封じるなんて、なんかのゲームみたいで格好いいジャン！  
「……で、数のことなんだけど」

ゆずるはじう言って良いものかと、目を空に泳がせた。そして、心なしか声を低めて言ひ。

「数の式神つて、大蛇だろ。雌の……。蛇の女つて、嫉妬深いんだよ。だから、数は大蛇一匹しか式神に持てないんだ」

「マジでえ？」

「しかも、その大蛇が、自分を物になんかに封じたら許さない、って言つたらしい」

「怖つ！ なんで数はよりによつてそんなあつかいのを式神にしてんだ？」

「俺たちは7歳で、初めの式神を持つ。本家の裏に山があるだろう？ あの山は九堂家の所有物なんだけど、いつさい人の手を加えず、妖怪の溜まり場にして、放置しているんだ。7歳になると、一人でその山に入らなければならない。そこで最初に出会つた妖怪と契約するんだ」

「契約？」

「それと見合うものを与える代わりに、自分の式神になれと」

「つまり、数が最初に出会つた妖怪が雲居で、雲居とその契約したんだな？」

「そう。要するに、あいつは運が悪かったんだ」

確かに運が悪かったのかも知れない。だが、数は自分の式神が雲居であることに何の不満もないようだった。

「数のような式神の所有仕方にも利点があつて、常に餌を与え続けているわけだから、その分成長するんだ」

「強くなるつてことか？」

「そういうこと」

「育成ゲームみたいだな」

それで？ と直久はゆずるに振り返つた。

「お前は？ ビリビリやり方してんだ？」

「俺の場合は……。俺の式神たちは普段、俺とは全く別の場所にいるんだ。九堂家当主が所有する式神は、その昔、小夜が所有していた式神と同じもので、あいつらは小夜ただ一人に服従している。代々の当主があいつらの主なれるのは、小夜が自分の子孫に使えるようになると命令を下したからにすぎない。だから、あいつらは他の式神のように主に絶対服従しない。あいつらはあいつらのプライドを持つて生きているんだ」

「確か妖狼だつたつけ？」

「そう、9匹の妖狼。九堂家の当主は8匹の妖狼を式神に持つて初めて当主と認められる。次代はその準備期間だ。俺はまだ5匹しか持っていない。あと3匹、自分のものにできれば……」

「ちょっと待て。9匹じゃないのか？」

直久はゆずるの声を遮つて、疑問を口にする。ゆずるは眉をひそめた。

「9匹いるうちの8匹でいいんだ。残りの1匹は、例え小夜の命令だとしても小夜以外の主を持つ気がない。式神にはならないから」「なんだそれ？」

「朝霧つていうんだけど、小夜が死んだとほぼ同時に、誰とも何とも関わりになりたくない、眠りについてしまったんだ」

「そういうヤツもいるんだなあ」

妖怪と言えども、人間並みに個性豊からしい。感心している直久は横目にゆするは続けた。

「俺の式神たちが普段どこにいるかと言うと、大伴家が守っている神社だよ。俺が一番扱い慣れているヤツで、先見つていうのがいる」

「さきみ？ 先見つて……」

「そう、お前んちの神社にいるんだ。あいつのことだから、俺が呼ばない時間は、社の中で転がっているんじゃないのか？ 屋根の上で昼寝しているかもしれないけど。あと、供物の酒を煽っているか

も。あいつザルだから」

そう言えば……と、直久は記憶を探る。

屋根の上を走り回る音が聞こえたり、社の中が散乱していたりすることが偶にある。その度に母親が見えない誰かに小言を言つていた。

「俺が式神を呼ぶと言つたのは、まさに呼ぶからだ。俺の声はどんなに離れた場所でもあいつらに届くから、ただ呼ぶだけでいいんだ。そうすれば、あいつらは駆けつけて来てくれる」

けど、と、ゆずるは小さく呟くように続けた。

「俺の式神であるのと同時に現当主であるお祖父様の式神もある。二人同時に命令を下せば、あいつらはあいつらのやりたい方を実行する。それに、あいつらの一番優先する主は小夜なわけだから、俺の命令に従わないこともあるんだ」

なんだか知りんけど、ゆずるはゆずるで大変らしい。数のようにお匹だけど、絶対服従してくれるつて方が分かりやすいし、よほど扱い安いんじゃないかと思う。

「次代様つていうのも大変なんだな」

力が無くて嫌な思いを散々してきた直久にとつて、次代だと崇められているゆずるは、自分にとつて対極に位置する存在だった。自分が欲しいと思っているものを全て持つていて、同じ年なのに回りの大人たちから対等の大人として扱われて……。

そうか、と直久はゆずるの顔を見つめた。俺つてば、こいつのことが羨ましかつたのかも。

こいつの周りばつか光が集まつているように見えて、自分は暗闇にいるように思えた。

両親はもちろん、鈴加もゆずることを一疋置いていて、数でさえ、ゆずるの言いなりだ。

嫌いだ、嫌いだ、と思い続けていたのは、こいつが羨ましかつたから?

今は、前ほど嫌いじゃない。苦手意識もいつ頃からか、消えてい

た。

怖いもの見たさ。

絶対、見た後で後悔すると分かっていても、車にひかれた猫の死骸を見てしまう。

そんな気持ちと同じ気持ちで、ゆずることが知りたいと思つた。初めは、たぶん、そうだった。

嫌いだけど、知りたい。もっとよく知つていて。

満月の夜、震えているあいつを見てしまつたから、あの時から、直久の中のゆずるは無視できる存在ではなくなつてしまつたのだ。自分とは全く異なる場所で苦悩しているゆずるに直久は柔らかく笑つた。すると、ゆずるも肩をすくめて笑い返してきた。そうして、言い放つ。

「あんまり、知つたふうに言つな」

口調は怒つているようなのに、照れているからそんな言い方をするのだと分かつてしまえば、どんなひどい言葉でも可愛い。だんだんこいつのことが分かつってきたぞ、と直久は一人ほくそ笑んだ。

## 5・ちよつと待て、余計わかんねー

ゆずるは、くこつと顎を上げて瞳に空を映すと、「口の式神を呼んだ。

「先見、風通り、来い！」

そんなんでやつて来るわけだから、簡単なものである。グラリと空間が歪んだ。ふわりと風が吹く。と、同時に酒の臭いが辺りに漂つ。

直久には見えない相手に、ゆずるは眉をひそめた。

「先見。お前、また飲んでいたな」

先見と呼ばれる式神と会話をしているらしく、ゆずるは間をあけて言葉を発した。

「つるさい」

直久は一人のけ者にされた気分で、面白くなかった。

「何話てんだ？」

「お前には関係ない！」

ちょっとと聞いただけなのに、ゆずるは顔を赤くして怒鳴つた。

なんだよ、すっげえー気になるじやんか。

ぶすっとした顔をすると、思い直したのか、ゆずるは何もない空間を指差して、この辺りに先見が、その辺に風通りがいると説明してくれた。が、全く見えない。

どんな奴らなんだろ？ やつぱり人型をしているのかな？

「俺が最初に式神にしたのは刀守りなんだけど、先見が一番扱い安いんだ。先見は少しだけ未来を知ることができる。8匹の式神の間でも相性つてものがあつて、先見と相性がいいのは風通りだ。風通りは風を操る。先見と二人揃えば、敵に対する先制攻撃が取れる」「なんつーか、むちやくちや RPGみたいだよな」

「RPG？」

## 「ゲーム」

妖怪、魔物といった類に弱い直久に対し、ゆずるは俗物弱かつた。

それを俗物と言つて良いのか分からぬが、世間のお子さまたちが普通に知つているようなことを知らないゆずるなのだ。

「で、何て話してたんだ？」

「迷い土はお祖父様の命令で動いているから、これからには来られな

いって」

迷い土つていうのもゆずるの式神の一人なんだろうけど、さつき話していた内容はそれと違うだろう。直久は直感する。

そんぐらいの内容で顔が赤くなるわけがない！

だが、それ以上詮索するようなことはしなかつた。同じでゆずるを怒らせても仕方がない。

直久はゆずるが式神に命令を下す様子を見守った。

「6歳の子どもがいるはずなんだ。探して欲しい。見つけしだい俺のどこに戻つてこい。いいな」

再び風が吹いて、酒の臭いが遠ざかっていく。去つていいく彼らを見送るよう、遠くを見つめていたゆずるが、不意に振りかえった。

「俺たちも探そう」

そう言つて、直久の手を引き、ゆずるは歩き出した。直久は低く答えてそれに従う。

どこからだるうか？

桜の花びらが直久の目の前までやつて来て、ひらりと舞つた。数歩先を歩くゆずると直久の間をひらりひらり舞う。それにゆずるは全く気が付いていないうつだ。

だが、直久には、まるで、その花びらが一人を引き裂くうとして、直久を惑わしているかのように見えた。

直久はゆずるの手を握る力を強めた。驚いて、ゆずるが振りかえる。

「何だよ？」

「え？ ……あ、いや」

「何だよ、と聞かれて答える言葉が無く、直久は狼狽える。急に繫がつた手が恥ずかしくなつた。

妙に熱い。怪訝そうな顔をするゆづるに何か言わなくてはと焦つて、直久は口を開いた。

「お前、他にどんな式神を持っているんだ？」

「他？」

ゆづるの眉がひそめられる。だが、すぐに答えをくれた。

「俺の式神は、刀守り、先見、風通り、迷い士、火刈り。刀守りと迷い士は雌狼で、刀守りの方が気性は穏やかだな。幼い次代を守る役目にあるんだ。だけど、彼女の一一番重要な役目は、神剣を保管することだ」

「神剣？」

会話が始まつたことにホッとして、直久は聞き返した。

「儀式の時に当主が使う刀。見た事……ないか。お前、ほとんど行事に参加しないもんな」

「悪かつたな」

ふて腐れた顔をした直久に少し笑い、ゆづるは直久の手を引いて再び歩き出した。

廊下はやたら長かつた。とても幼稚園の廊下とは思えない。 静まりかえつた辺りにゆづるの声が響いた。

「迷い士は、数の雲居と張るくらい美人な奴だ。けど、何を考えているのか、未だに、俺には分からない。

式神は主を主だと認めて式神になつてくれるものだけど、俺は迷い士に俺のどちら辺を主だと認めて貰つたのか、分からない

「何だ、そりやあ？」

「さあ」

ゆづるの肩がわずかに上がつた。ため息が漏れ聞こえた。

「迷い士は、地の力を使つたり、敵からの攻撃から守つてくれたりしてくれる。他にも、敵を惑わしたり、傷を治してくれたり……。

先見のことはいいだろ？ さつき言つたから。風通いは風を操る。

先見とも相性が良いけど、火刈りとも良くて、3人そろえば、どうしようも手に負えない漫才トリオだ。ただ、二人は先見ほど気安くなくて、特に火刈りはプライド高く、扱い難い」

ようやく次の教室の前に着いて、ゆずるはドアを開ける。

薄暗い、誰もいない教室。そう簡単に見つかるわけがないと、ゆずるはドアを閉めて、足を先に進めた。

「だから、火刈りは、月齢26から6の間しか使うことができないんだ」

「月齢？」

「新月を0と数えた日数のことだ。満月はだいたい15で、29まで数えると、0に戻る」

「いまいち分かんねえーんだけど？」

「新月というのは、太陽と地球の間に月が入った状態で、その3つが直線上にあり、地球から月がまったく見えない時のこと。この時の月齢は0。それから約一週間で、上弦の月になる。上弦の月つていうのは、太陽から90度東に月が移動し、地球から半分だけ見える月のこと。この時の月齢は7・4前後。それで……」

「ちょっと待て、余計わかんねー」

突然始まった天体授業に直久は両手を上げた。途中で言葉を遮られて、ゆずるは不快そうに顔をしかめた。

「聞いたのはお前だ。最後まで聞けよ」

「つか、その月齢とお前が式神を呼ぶのが、どう関係あんの？」

「それは」

直久の問いにゆずるは言葉を詰まらせた。気のせいいか、ゆずるの顔がほんのりと赤い。

「それは、ほら、俺つて、月に一度力を失うだろ？」

「ああ」

「そうだ。ゆずるは九堂家の御曹司にふさわしい強大な力を持っているが、それは不安定なもので、

月に一度、まったく失つてしまふ時があるのだ。

力を失つたゆするが必死になつて直久にしがみついてきた時があった。その時を思い出して、直久は頷いた。

「あれつて、月の満ち欠けに関係しているんだ。満月に完全に力を失つて、逆に新月の時は絶好調みたいに。満月に近付けばそれだけ弱まり、新月に近付けば強まる」

「で、今日はどのくらいなんだ?」

「5・6くらいかな」

「ぎりぎりってどこか?」

さつき火刈りを使えると言つていた月齢を思い出して言つと、ゆするも頷く。

「ああ、そうだな。俺が好調だと感じる期間は、月齢26から6だから」

「なあ、ところで、なんで29で、0で戻るんだ?」

「それは、月が地球の回りを一周するのにほぼ一ヶ月、正確に言えば29・5日かかるからだ。ほら、旧暦は29日から30日までしかないだろ?」

「そうなのか?」

即、聞き返した直久にゆするは目眩を感じて額を抑えた。

「そりなんだよつ。ちなみにお前のおつむが良くなるように言えれば、月齢にプラス1をした整数部分が旧暦の日付とほぼ一致するんだ」

「へー」

そんなことを聞いた直久で直久の頭が良くなつたとは、とても思えない。軽い返事すると、ゆするはおおげさにため息をついた。

「要するに、カレンダーの日付が30日から1日にもどるようにな、月齢も29で0に戻るんだ。もつとも正確に言えれば、29じゃなくて、29・いくつ……なんだけどな」

そう言つて、ゆするは足を止めた。次の教室の前まで来たのだ。ゆするはアドアに伸ばした手を、その途中でピタリと止めた。

「ん? どうした?」

「何かいる」

「何かつて？」

ゆずるの顔から、莉恵じやないことは伺えた。すると、夢魔なのだろうか。

「逃げよう。やばいって」

だが、直久の制止も聞かず、ゆずるはドアをスライドさせた。ガラリ。軽い音が辺りに響いた。

二人の目に薄暗い教室が映る。先程同様の薄暗い教室。だが、今回教室には誰かがいる。

いや、誰かがではない。教室の椅子、一つ一つに何かが座つていたのだ。

子どものようなソレは、きちんと椅子に座つて、皆同一方向を見つめていた。

ソレは、優香や莉恵が、8年ほど以前はゆずるも直久も着ていた浅黄色の制服を着、黄色い帽子を被つている。

「な、なんだ？」

「人形……」

その一体に近寄つて見てみると、縫い合わせた布に綿を詰めた簡単な作りの人形であることが分かつた。

帽子からはみ出した髪の毛は毛糸で、目玉は大きな黒いボタン。鼻は無く、口は逆三角形の赤いフェルトだ。制服はまるで、てるてる坊主みたいに顎の下から縫いつけられていた。首がないのだ。

ズボンやスカートも履いていないようだ。浅黄色の生地から、白く、丸みのある足が覗いていた。腕も棒のようで、制服に縫いつけである。指は無かつた。

「なんだ、これ？」

直久に、さあ、と肩をくめてゆずるは教室から出た。引きずられるようにして直久も外に出ると、ゆずるはドアを閉めた。

「一つの場所に長居は無用だ。次に行くぞ」

そう言って、ゆずるは歩き出す。

しばらくして、次の教室にたどり着いた。そこでもゆずるはドアを開けることに一瞬躊躇する。

また何かいるらしいと、直久も気を引き締めて目を見張った。ドアを開けると、やはり中は薄暗く、ぼんやりと子どもの影が見えた。

すぐにそれが人形であることに気付くと、直久はそのうちの一体を覗き込んだ。

人形は人形だが、先程の人形よりも人間らしく作られている。フランス人形のように、肌はゴムで、髪の毛も一本一本が糸のようなものでできていた。

目も傾けると瞼が閉じるようになつていて、鼻もあるし、薄く開いた口もそれらしく作られていた。

やはり制服を着ているのだが、

今度は、男の子はズボンを、女の子はスカートを履いていて、表情もそれぞれ異なっている。

人形は皆同一方向を向いており、その目線を追いかけるようにそちらを振り向くと、オルガンが置いてあつた。

オルガンの前に何かが座つていて、それも人形だとすぐに気付く。大人の人形で、女性だった。

クリーム色の洋服に桃色のエプロンをしている。その人形に近付こうとすると、それを止めるようにゆづるが手を引いた。

「行こう」

「……ああ」

どうやらゆづるは異常なしと判断したらしい。直久の手を引いて教室から出ると、静にドアを閉めた。

再び長い廊下を歩き出す。

しばらく歩いて、次の教室にたどり着いた。やはりそこでもゆづるはドアを開ける前に息を呑んだ。

その様子に一瞬緊張を走らせた直久だが、どうせまた人形だろうと、すぐに肩の力を抜いて、ゆづるがドアを開けるのを見守つ

た。

薄暗い教室。ぼんやりと浮かぶ子どもたちの姿。

さつきの教室の人形よりもまた造りが精巧になっていた。

頬を指で押せば柔らかくへこみ、ぶよんと揺れて元の形に戻る。髪もミシン糸よりも細いものでできていた。目はガラス玉などではなく、潤みを持ったもつと別の何かで、鼻も奥まで穴があいていた。歌うように開かれた口の中には歯や舌があり、今にも動き出し、そこから声が聞こえてきそうだ。

「気味が悪い」

ボツンと呟いたゆずるに直久も頷きながら、人形たちが見つめる先を目で追つた。

そこにはオルガンが置いてあった。オルガンの前には、やはり何かが座つていて、それもすぐに入形だと分かる。またかと思いながらも目をこらえると、その人形はさつきの教室の人形とは異なり、奇妙な格好をしているのに気付いた。

先が一股になつたとんがり帽子。赤や青、黄色など様々な色の布地を継ぎ合わせたダボダボの洋服。

もう少しよく見てやろうと、直久はそれに歩み寄つた。

異様に白い顔。赤く丸い鼻。唇は青く、目の回りは黒く十字に塗られていた。

「ピエロ？」

「……みたいだな」

次の教室に行こうと、ゆずるが手を引いたので、直久はピエロの入形から目を逸らした。その時。

ポーン。

オルガンの音が聞こえて一人は同時に振り返つた。ピエロの両手がオルガンの鍵盤の上に置かれている。

う、動いた？ 人形が？！

そんな疑問を感じている暇なく、二人の目の前で白い両手が動き出した。滑らかに鍵盤の上を滑つていく。

聞こえてきた曲は、ピアノなど畳つたことのない直久でも弾ける

『ねこふんじゅつた』だった。

それは、始めはゆっくり、しだいに聞き取れないほど早くなつていぐ。

ゆずるは直久の手を引き、ピアノから皿を逸らさないよにじて徐々に出口の方に足を運んだ。

つづひとつと、頬を汗が伝つ。

「なんだ? いつたい」

「しつ、口を開くな」

ゆずるの様子から危険を感じ取つて、直久は大人しくゆずるに従つた。一度早くなつた曲がまたゆっくりとなつていぐ。

歌えるほどゆっくりになつたといふで、子どもの人形が一斉に歌い出した。

『ねこふんじゅつた ねこふんじゅつた  
ねこふんづけゅつたら ひつかいた  
ねこひつかいた ねこひつかいた  
ねこびつくりして ひつかいた

わるいねこめ つめをきれ  
やねからおりて ひげをそれ

ねこ 二ヤーゴ 二ヤーゴ ねこかぶり

ねこなでじえ あまえてる

ねこじめんなさい ねこじめんなさい  
ねこおどかしちやつて じめんなさい  
ねこよつといで ねこよつといで  
ねこかつぶしやるから よつといで

これつて、こんな歌だっけ?

そういえば、弾いたことはあるけど、歌つたことはないな。

直久が首を傾げると、ゆずるは強く手を引いた。振りかえると、あれを見ると目で人形たちを指す。

そちらを振り向いた直久は、思わず息を呑んだ。子どもの人形が歌いながら、二人の方にゅつくりと歩み寄つてきているではないか。動きが鈍いから余計に、両手を伸ばして近寄つてくる様子は、いつかやつたゲームのゾンビみたいだ。

『ねこふんじやつた ねこふんじやつた  
ねこふんづけちやつたら とんでもつた  
ねことんじやつた ねことんじやつた  
ねこおそらへとんじやつた

あおいそらに かわさして ふわり ふわり くものうえ  
ゴロニヤーゴ ニヤーゴ ないている  
ゴロニヤーゴ みんな とおめがね

ねことんじやつた ねことんじやつた  
ねこすつとんじやつて もうみえない  
ねこグッバイバイ ねこグッバイバイ  
ねこあしたのあさ おりといで』

歌が終わつた時には手が届く距離で、一人の服を掴もうとする。一人の手を振り払う間に、3人の手を伸び、それに気を取られている間に背後の人形にベッタリと抱き付かれた。

一人にそれを許せば、あとは団子のように、後から後からくつついてきて、直久もゆするも身動きが取れなくなつた。

膝の裏を蹴られて、ガクリと床に倒れれば、背中に乗り上げられ、頭を押さえつけられる。

両腕それに一体の人形がぶら下がり、首からぶら下がるもの、

腰の辺りに腕を回してくるもの……と、苦しいほどに引っ付いてくる。

咽元に手がかかつた時、我慢の限界を感じて、直久は腕を力一杯に振り上げた。

人形とはい、子どもの姿をしているせいで、どこか抑えていたところがあつたのだ。これ以上の我慢はできなかつた。

腕にぶら下がっていた人形が手を離し、尻餅を着いた隙に直久の首を絞めようとしていた人形を掴み、直久はそれを片手で遠くに投げ飛ばした。続いて、背中にへばり付いている人形に手を伸ばす。

それも投げ飛ばすと、直久は立ち上がつた。

その間、ずっと手を繋いだままにしていたゆづるの救助に向う。同じように人形に押し倒され、もみくちゃになつているゆづるを、手を引いて立ち上がらせながら、それを邪魔しようとする人形を蹴り飛ばしていく。

人形はコンマ数秒間空を舞い、近くの壁に叩き付けられて床に転がつた。

腕や足が折れたり、頭が割れ、中からじす黒い液を垂れ流すものもいたが、痛みを感じない体は何度でも起きあがり、二人の方に手を伸ばしてくる。

「くそつ」

きりがない。

オルガンを弾き続けるピエロに目を向ける。人形を操つているのは、あのピエロに違ひなかつた。

そう思つた時、不意にピエロが直久の方に振り向いた。にやりと、青く塗られた唇が横に引かれた。

直久はその笑みに、自分の考えの正しさを知つた。

あの、あのピエロを何とかすれば……。

「直久、だめだ」

ピエロに飛びかかるうとしていた直久をゆづるが止める。

「なんで？」

「お前には無理だ。勝てない」

ゆずるは直久を見ずに、静かに、静かに、言葉を一つずつ噛み締めるように言い放った。

「あいつが、夢魔だ」

## 6・もしかして、お前、高所恐怖症？

「……夢魔？」

「えつ。つーことは、もしかして、まづくねえ？  
ゆずるにやえ手に負えない相手だつて言つてなかつたつけ？  
んで、鉢合わせしないようにしようつて、言つてたよなあ？ 思  
いつ切りしちゃつてんじやんか！」

どうするんだよ？ といつ目をゆずるに向けて、あたあたしている  
直久を、嘲るようにピヒロは立ち上がり、ゆつたりとお辞儀をした。

「はじめまして、僕はパノンつていうんだ。君たちは？」

背丈は直久と同じくらいか、もう少し高いかだ。

少年のよつな声だが、年齢は分厚い化粧に隠されて、よく分から  
ない。

パノンといつのは、おやらく彼の名前なのだろう。……だとし  
たら、君たちは？ といつ問には、自分たちの名前を聞いていふこと  
になる。

だが、素直にそれを教えていいものか戸惑つてはいるが、パノンは、  
童話とかの挿絵の妖精が履いているよつな、つま先が天上に向いた  
靴を、トントンと踏みならした。

「本当は、ちやんと知つてはいるんだ。九堂家のお坊ちゃんだ。君に  
会いたくて、この夢の中で待つていたんだよ」

隣でゆずるが息を呑む。

「君の肉を喰らひつて、強くなれるつてホント？ 試してみていい？」

一ヤリと笑つた歯が黄色い。牙のよつなものが見えた。

繫がつた手からゆずるの震えが直久のもとに伝き、直久は背中で  
ゆするを庇うように立つた。

直久の太股に激痛が走つた。何事かと目線を下ろすと、人形が直

久の左足に鉛筆を突き立てていた。

「痛い？」

直久と目が合つと、その人形は無邪気に笑つて言つた。

「ねえ、痛い？」

振り払おうとして、はつとする。人形は自分の幼い時にそつくりな顔をしていた。

ケラケラ笑つて、直久の足から鉛筆を引き抜くと、今度は右足に突き立てようと腕を振り上げた。

だが、いつまでも大人しくやられたままになつてゐる直久ではない。突き立てられる前にその腕を掴んで、人形の体を遠くに放り投げる。

ゴツン。

鈍い音をたてて人形は床に転がつた。それを見て、パノンは信じられない、声を上げる。

「ひどいなあ。僕のおともだちをいじめないでよ。意地悪する子はお仕置きだよ」

そう言つて、どこからともなく取り出した物を高々と振り上げた。斧だつた。片手で持てるほど小さな物だつたが、紛れもなく斧だ。

直久はゆづるを胸に抱いて、横に飛んだ。

床に倒れてから、斧の行方を確認すると、一瞬前まで自分たちが立つていた場所の後ろの壁に深々と突き刺さつていた。

壁には大きく亀裂が走り、刃のほとんどが埋まつてゐる。もしも避けずに当たつていたら、ケガしちやつた、てへ……どころの騒ぎじやない！

胴が真つ二つになるところだつた。

パノンは避けられたことに顔をしかめ、

「どうして避けるの？　だめじやないか」

と、もう一本斧を取り出す。まさか、それも投げるんじや……。

直久の嫌な予感は的中し、斧がパノンの手から離れる瞬間、直久

は再びゆずるを抱えて、床を転がつた。

ドスッ。

堅いタイルの床に斧が突き刺さる。

「次は2本いっぺんだよ」

おもしろがっている声が聞こえて振りかえると、パノンが両手に斧を掲げている。

「ゆずるっ」

なんとかしろっと直久は訴えた。

いくら反射神経と体力に自信があると言つても、百発百中で避けられる自信はないし、無限の体力を持つているわけでもない。

直久の呼びかけにゆずるは頷いて、パノンの方に両手を広げる。

「火刈り、お前の炎を貸してくれ！」

そう、ゆずるが声を張り上げると、その両手から炎が放たれる。人間3人が向かい合つて手を繋ぎ、できる限りの大きな輪を作つたくらいの大きさの青い炎だ。

「直久、今のうちに」

炎がパノンを襲つている間に逃げようと、ゆずるが直久の手を引いた。

言われなくともそうするつもりだと直久は頷いて、教室のドアを開けた。そして、目の前に広がつた外の景色に唖然とする。

「なんで？」

そこは幼稚園の運動所などではなかつた。もつと記憶に新しい、小学校の校庭だつたのだ。

「なんで……」

「言つただろ？ 夢なんだから、こういうこともあるんだつて」  
気にする様子もなく、ゆずるは校庭に降り立つた。数百メートル

先に校舎が見えた。

二人が6年間通つた懐かしさ溢れる小学校の校舎だ。

「一日の大半を過ごす幼稚園と、入学するのを心待ちにしていた小学校。どちらも莉恵ちゃんの夢の舞台になつてもおかしくない場所

だと思「う」

「確かに」

迷つてゐる暇はなかつた。後ろには夢魔がいる。他に道がないのだから、突き進むしかない。

ゆづると直久は小学校の校舎に向かつて駆け出した。

後ろから何かが追つてくる気配を感じながら、昇降口をぐぐる。幸い鍵が掛かってい、もしも扉が開かなければ窓ガラスを蹴破る覚悟をしていた直久は、少し拍子抜けして校舎の中に駆け込んだ。

一人は急いで昇降口の扉を閉める。

そこで初めて追いかけてくるモノを振り返つた。すると、先程の子どもの人形たちが、ぶつとい釘を持つて、のろのろと追いかけてきていた。

直久が蹴り飛ばしたせいなのだろうか。腕のないもの。足が無く、這いずつてくるもの。

頭が割れ、目玉が飛び出し、どす黒い液を垂れ流しながらやつてくるものもいた。

壊れているからなのか、子どもの足だからなのか、『のろのろ』というのに相応しいほど、動きが鈍い。

あれなら、追いつかれる心配はないだろう。 けど、すっげえ

ー、ぶ・き・み。

「五寸釘だよな、あれって。丑の刻参りでもする気か?  
「せいぜい髪を取られないようにしろよ」

昇降口の鍵は螺子を回して開け閉めするタイプの鍵だ。ゆづるは人形たちの様子をチラリチラリと見ながら、螺子を回している。直久も手伝つて別の扉の鍵を閉めにかかつた。繋いでいた手を離

すと、じつとりと汗が噴き出でていた。

「確かに、この小学校には昇降口が3つあったよな」

「職員用のやつを含めたら4つだ。南校舎と北校舎に2つずつ」  
この小学校は南校舎と北校舎がある。渡り廊下が4カ所にあって、  
『田』の字を横にした形をしている。

「「」を閉めても他の所から入ってくるだろ? な。けど、十分に時間は稼げる」

「んじゃあ、さっさと逃げるか。……って、お前ヤー」

「あ?」

「その格好、動き辛くねえ?」

近すぎて見えなかつたのか、あまりにもゆづるが自然に振る舞つていたからなのか、今まで気が付かなかつたが、ゆづるは狩衣姿だつた。

「よくそれで走つたな」

運動部の自分と同じスピードで駆けたのだ。毎日バスケ部で鍛えている自分と! 駆ける、跳ぶ、泳ぐとは縁が遠そうなゆづるが! 感心していると、ゆづるは肩をすくめてフツと笑つた。

「俺は走つていない。体重を軽くして浮いていた」

「浮いていたあ?」

「お前は風船を持って走つたみたいな感じがしたはずだ」「したはずだつて……ええ?」

「に、に、人間じゃねえ」。

ゆづるは風船がフワフワ浮いている図を想像して直久は一步後退る。ゆづるは笑つた。

「確かに動き辛いかもな。着替えるか」

そう言つと、くるりとその場で回る。

え? 信じられんと直久は田を見張つた。一瞬でゆづるの着替えが完了してしまつたのだ。

狩衣から自分と同じ制服姿になつたゆづるにもう一步、直久は後退つた。

「マジでえ？」

自分たちの中学校は、女子はセーラー服で、男子は学ランと決まっている。

学ランは真っ黒な上着に、金色のボタンが6つ付いているやつだ。ズボンも黒い生地で、靴も黒いローハーを指定される。入学式や卒業式など行事の時にしか用のない帽子もあるが、これもやはり黒い。

「お前、それ、楽でいいよな……」

毎朝の支度が早そうだ。ゆづるは軽く笑うと、直久に手を差し出した。

「行くぞ」

「あ、ああ」

直久はその手を取つて、握り締めた。

南校舎の昇降口から入つて廊下を右に行くと、2年生の教室が3つある。左に行くと階段があり、更に行くと職員室があり、校長室、事務室と続き、職員玄関がある。

二人は階段を駆け上がつた。

2階は1年生の教室と図書室、図工室などがあつて、その前を通り過ぎ、渡り廊下を走つた。

北校舎の2階には、3年生の教室と4年生の教室がある。ちなみに北校舎の1階は、今は使われていない教室が並んでいる。生徒が多かつた時期にはフル活用していただろうつそには、少子化が進んでいる現在では物置と化しているのだ。

「1年の教室に居なかつたということは、いったいどうしていのと思つ?」

「莉恵ちゃん?」

他に誰を捜すんだ?という顔をされたので、直久は、そうだなあ、

と天井を見上げた。

「屋上とか？」

「屋上？」

「ほら、小さい子って高いとこ好きじゃん。高い高いすると喜ぶみたいなカンジでさー」

「莉恵ちゃんをいくつの子どもだと思っているんだ？ 優香と同じ年だぞ」

そう言って呆れた顔をしたその顔が、直久の太股を見て眉をひそめた。

「お前、それ」

見ると、右足の太股のところがじつとりと湿つている。黒い制服のため目立たないが、よく見ると、その部分だけより一層濃い黒となっていた。

拭うようにそこに触れ、田の高をまで持ち上げて手の平を開くと、べつとりと赤く血が付いてきた。

「げ

さつき自分そっくりの人形に鉛筆を突き立てられたところだ。ケガをしていると気付いたとたん、痛くなるのは何故だろう？ 直久は低く唸つて、ゆづるの手を離すと、その場に足を投げ出してしゃがみ込んだ。

「いつてえー」

「気を付けるよ。お前がケガをすると、数も同じところにケガを負うんだからな」

ゆづるもしゃがみ込んで、そつと直久の太股に手を乗せた。ゆづるの手が熱い。

少し目を伏せ、じつと自分の太股の傷を見つめてくる。視線が熱い。ゆづるが触れている傷口から熱が広がって、体中が熱くなつた。沸騰しそうだ。

息が苦しい。くらくらする。胸が激しく鳴る。痛い。胸が痛い。足の傷よりよほど痛い。

ゆずるの手に上に自分の手を重ねてみたくなつて、直久は手を伸ばす。

「どこでも良かった。手でなくとも。どこでもいいから、ゆずるに触れてみたくなつたのだ。

だが、直久の手が届く前に、ゆずるは手を離した。気が付くと、傷の痛みがひいていた。

「お？ 治つた？」

「完全には治つていない。痛みは和らいだと思つが」

「おう、ゼーんぜん痛くねえよ。サンキュー」

感謝を込めて笑顔を送ると、ゆずるは顔を赤らめた。

うわっ。ゆずるが照れてるう。な、な、なんか、可愛いかも。もしかして、数並みの可愛い？

そりやあ、いとこだし、顔の造りは似ているんだけど、今までゆずるを可愛いだなんて思つたことない。

つーか、ゆずるつてば、可愛いしないし。

自分勝手で、オレ様な奴で、ひたすらムカツク奴なんだけど、なんか、礼を言つただけで照れちゃつてるこいつは、なんか可愛いかも。

再び心臓がドキドキ鳴りだして、直久は胸をきつく押さえた。やっぱあー、ゆずるなんぞにときめいてしまつた。俺には数とうダーリングがいるのに……。

数が聞いていたら、

「何バカなこと言つてるの？ 直ちゃん、あつたま、おかしいんじやない？」

と、言われただろうことを心の中で喰いて、直久は頭を抑えた。明らかに様子のおかしい直久に、ゆずるは眉を寄せた。

「どうかしたか？」

覗き込んでくるゆずるの顔が直視できない。

俺はこいつが嫌いだつたはず……。だつた、つて、なんでもう過去形になつているんだ？

ち・が・う・んだつて、嫌いなんだつて！『嫌い』進行形なんだつて！

そりやあ、見直したところとか、こいつもいろいろ大変なんだなあ～つて発見したところとかあってさ、前ほど嫌いってわけじゃないけど。

でも、やっぱり、傲慢で、我が儘で、人を見下した態度が嫌いだ。そうだ、嫌いなんだ。

はあ～い、問題解決！俺はこいつが嫌い。大好きなのは数オンリー！

よしそと氣合を入れてゆずるの顔を見上げた。

「何だよ？」

急に顔を上げた直久に、ゆずるは少し怒ったような顔を返した。そして、手を差し出す。

「ゆっくり覗いでいる暇はない。行くぞ」

「そうだな。早く莉恵ちゃんを見つけてあげないとな」

そう言いながら立ち上がった直久だったが、ゆずるの手を取ろうとしない。

怪訝な顔をしたゆずるに直久は脣を歪ませた。

「動きづらいじゃん。繋いでつとむー」

「……そうだな。」

低く答えたゆずるの声を聞いて、どうしたのだろうか、胸が痛い。その痛みの原因をゆっくり考えている時間は、この時の直久には無かつた。言じようのない不安と視線を感じて振りかえる。

すると、薄暗い廊下の先にピエロの姿が見えたような気がした。ような……とか、気がした……とか、曖昧に言つたわけは、一瞬見えたピエロの姿は、見定めよつと焦点を合わせたとたん消えてしまつたからだ。

嫌な予感がして、反対側の廊下に振りかえる。ぼおつと見えたピエロの姿は先程と同じように一瞬見えて、すつと消えた。

再び気配を感じて、最初に振り向いた廊下の先に目をやると、や

はりピエロが一瞬姿を見せて、消えた。

気のせいか、先程より距離が縮まつたようだ。

左右交互に振り向くたびにピエロが姿を現し、しだいに一人に近付いてくる。一瞬見えたピエロは両手に斧を持って笑っていた。

「直久」

「ああ?」

「さっき屋上とか言っていたよな?」

「ああ」

「行くぞ」

「へ?」

直久の答えを待たずに、ゆずるは駆け出した。ピエロから逃げるようにな階段を駆け上る。

直久は慌てて後を追つた。

この小学校は3階建てだ。すぐに階段が終わり、屋上に出る扉が二人の前に立ち塞がつた。

重たく、大きな扉だ。普段は鍵がかかっていて、生徒が無断に使用できないようになつていて。

だが、ここは夢の中だ。きつと開くはず。

開け!と強く思いながら、ゆずるが扉を開けるのを見守った。背後から何か得体の知れない気配が迫つていた。

「ゆづる!」

ピエロが来る。ピエロが!

笑い声が聞こえる気がした。斧を振り回す音が聞こえた気がした。ゆずるがノブを回す。ガチャリ。鍵はかかっていなかつた。ゆつくりと重たく扉が開く。

「なつ」

「どうした?」

扉の外を見て啞然としているゆずるの肩を押しやつて、直久も外を見た。すると、そこは屋上などではなかつた。何もない空間が広がつていた。

いや、何もないわけではない。星をちりばめた夜空と、数メートル下に待ち構えるプールがあった。

「なんで、この下がプールになっているんだよ？」

「俺が知るか！」

迷っている暇はなかつた。ピヒロの気配が近付いてくる。笑い声が大きくなつてくる。

「行こう！」

「無理だ。こんな高いところから……」

「下はプールだから、へきだろ？」

「20メートルの高さから落ちた場合、水はコンクリートと同じ硬さになるんだ」

「20メートルもねえよ。4階くらいの高さだから、10メートルくらいいじやん？」

嫌がるゆづるに直久は、はてと思つ。

「もしかして、お前、高所恐怖症？」

「違う！」

「じゃあ、問題ないじやん。行こうぜ」

ニヤニヤ笑う直久を殴つてやりたいと思つゆづるだつたが、迫つてくるピヒロのことを思つと、そんなことに時間を使つている余裕はなかつた。

ゆづるは意を決して床を蹴つた。身体が空に放り投げられる。それを確認して、直久も急いで後を追つた。

## 7・そんなこと、俺に聞くな。俺に

基本的に、俺は陸を駆ける男だけど、水中も得意なわけで、そこ泳げるわけだ。

これ、ハツキリ言つて、自慢… だつてさー、ほら、陸上部の奴とか、陸では敵無しみたいな奴に限つて、

水泳が不得意な奴が多いじゃん。

俺んとこの学校じゃあ、2学期に水泳の授業評価が付くんだけど、1学期と3学期はめちゃ良いのに、2学期だけ悪いの。水泳のせいださー。

そんな奴が多い中、俺は年間通して5段階評価の5！オール5！ 体育だけは5！

…だけは、つていうのが悲しいけど、まあそんなわけで、プールに投げ込まれた俺は問題無く、ドボンッと一度深く沈んでから、すぐに腕で水をかき、水面に顔を出した。

「はあっ」

大きく息を吸つてから、プールサイドまで泳ぐ。

信じられないことに足が底につかないのだ。学校のプール、しかも小学校のプールとは思えないほどの深さである。底を見ようとしても、暗闇が見えるだけだった。

プールサイドに泳ぎ着くと、直久はゆずるの姿を探した。

自分より先に飛び込んだはずのゆずるの姿がないと気が付いたのは、自分の呼吸が確保されてからしばらくたつた後だった。

「ゆずる？」

まさか……。

ゆずるがプールに飛び込むのを渋つていたのは、高所恐怖症だからじゃなくて、泳げないからではなかつたか？

直久は青ざめる。本当に血が引いていく感じがした。

「うそだろ？ 泳げないのかよ？」

直久は再び水中に顔をつけて、ゆずるの姿を探した。

水面から見つからないとすれば、深く沈んでしまったのだろう。

両腕を掻き、深く潜る。

泳げないのなら、泳げないって言えつーのー。

だが、ゆずるのプライドの高さから考えて、できないとは言えなかつたのだろう。

察してやれなかつた自分が悪かつたのか？ いいんや、んなわけがない！

あいつのプライドの高さが悪いんだ！

ブツブツ言いながら、直久は水を蹴った。光が遠くなつていく。暗闇の中、弱々しく光るものを見つけて、手を伸ばした。たぶん、ゆずるだろうと直感する。ゆずるは直久から見て、いつだつて光の中で生きていたから……。

思った通り、それはゆずるだつた。

力一杯に水を掻き、ゆずるの体を引き寄せると、直久は水面を見上げた。

遠い。気まで遠くなりそうな距離だ。だが、じじじで気絶している場合じやない。絞り出した力で水を蹴る。

片手でゆずるを抱きながら、もう一方の腕で水をかく。苦しい。息が。

酸素が欲しくて、半ば藻掻くよつこ、上へ、上へ、泳ぐ。

「はあっ」

口が空気に触れたと同時に、水もろとも酸素を肺の中に詰め込む。

「ぐつ。げほつ。じほつ、じほつ」

あまりの苦しさに涙が流れ出た。咳き込みながら、やつとの思いでプールサイドにたどり着くと、まずはゆずるを水から上げ、自分も上がる。

「おいつ」

呼ぶが返事がない。揺すっても反応がない。

息は？ 口元に顔を近付ける。していない……？

心臓は？ ……動いている。弱々しくはあるが確かに動いている。

わずかにホッとして、直久はゆずるの頬を叩く。

「ゆずる、おいつ。しつかりしろよ」

どうするんだよ、こういう時！ もつとしつかり真面目に保健の授業を聞いとくんだつた。今更ながら後悔する。

こういう時はやっぱし、人工呼吸か？ 心臓マッサージは心臓が動いている時はしちゃいけないんだよな。

人工呼吸なのか？ やっぱし。するのか？ 俺が？

つーか、俺しかいねーし！ 俺がやるしかないんだよな。

直久はゆずるの頬に手をかける。

「……と、その前に襟元開けた方が良いのか？」

学ランは詰め襟だから、普通の時でさえ苦しい。

直久などは上方の金具は止めないで、できるだけ緩ませてしまふそれを、ゆずるは律儀にしつかりと閉めていた。震える指でそれを外す。

ボタンは？ ……2つくらい開けてやるか。

金ボタンに手をかける。ボタンを外すと上着が開き、ゆずるの喉元が露わになつた。

上着の下は白いシャツを着ている。濡れたそれは、肌色を透かせていた。再びゆずるの頬に手をかけ、上を向かせる。いつか読んだ教科書の挿絵を思い出しながら、直久はゆずるに顔を近付けた。

直久の髪から落ちた零がゆずるの頬の上を滑るように流れる。それを見送ると、直久は大きく息を吸い込んだ。直久の影が、ゆずるにゅつくつと覆い被さつた。

「んつ」

何度か息を吹き込んでいると、うめき声が聞こえた気がして、直久は口を離した。

とたん、ゆずるは水を吐き出し、咳き込んだ。

「げほつ。げほつ」

「ゆずる、大丈夫かよ？」

返事はなかつたが、規則正しく聞こえてきた呼吸に直久は安堵する。

よかつた。

濡れて冷え切った身体を抱き締めた。じばらくの間、暖めるようになっていた直久は、ゆずるの身体の不思議な触感に気が付いた。

なんでこいつ、こんなに柔らかいんだ？

細い、細いとは思っていたけど、マジで筋肉ないよな。男なら、もつとガツチリしてた方がいいんでない？

つーか、なんでこいつ……。

もつとよく確かめようと、肩から腕、腹筋へと触れているつまひに胸へと手が伸びた。

え？

他の部分とは比べようがない柔らかさを感じ取って、直久の思考回路が停止する。

ええ？ なんだ、これ？

手だけじゃなくて目でも確かめようと上着の中を覗き込む。見え難いと思い、ボタンに手をかける。

上から3番目のボタン、4番目のボタンと、ゆっくりと外していく。すべてのボタンを外し終えると、上着を左右に開いた。思わず唾を飲み込んだ。

すっかり透けてしまつた白いシャツ。くつきりと形を露わにした

肌。

「マジかよ……」

濡れたシャツは肌色を透かせながら、胸の辺りで膨らんでいた。

その山のてっぺんのピンク色の丸い小さな突起に、直久は顔を赤らめる。

「マジでえー？」

「これも夢だからか？ そうなのか？ 夢だから、ゆずるが女になつちましたのか？」

「そうなんだよなあ？ ああーっ、もおーっ、今、ここに数がいてくれれば！」

んで、

「もうなんだよ、直ちゃん。夢つてすゞいよねえ。いろんなことが起つっちゃうんだから」

……つて、言つて欲しい！！

「……」

「んー」

「うわっ！」

「痛っ」

ゆずるのうめき声に驚いた直久が思わず手を離したために、ゆずるの身体が固いスタイルに打ちつけられた。

すぐに謝ろうと口を開くが、言葉が出てこなかつた。

痛みを感じたおかげで、意識を戻したらしげゆずるは、ゆっくりと身体を起こす。

その拍子にハラリと上着が大きく開いて、胸が露わになつたのだ。見たくない、いや、見るつもりはないのに、直久の目は自然にゆずるの胸へと向けられてしまう。

「お、おま、お前っ」

「なんだよ？」

口を開いたり閉じたりして、言葉にもならない声を発している直久に、ゆずるは眉を寄せる。

「そ、それ。つーか、何それ？」

「はあ？」

直久が指差すものを追つて、自分の胸元を見る。その瞬間、ゆずるは頭の中が真っ白になる。

透けて見える自分の胸の輪郭に驚き、声も出ない。慌てて上着の

前を搔き合わせて、直久を睨んだ。

「見たのか？」

見ていないはずはないと知りながら、見ていないで欲しいと願う。声も、身体も震えてしまう。ゆずるは返答次第では殴つてやろうと固く握り拳を作つた。

その時、ゆずるの頬を流れていったものは、水の雫だったのだろうか？

それとも、瞳から溢れ漏れたものだつただろうか。

緊張した面持ちで答えを待つゆずるに、直久は頭を縦に振り落とした。そして、ゆずるの想像の域を超えた言葉を言い放つたのだ。

「お前、女になつてるぞ」

「はあ？」

「女になつてる。」これも夢だからなのか？

「ゆめ……？」

「もしかして、俺もいきなり性別が変わつちまつたりするのか？」直久の真剣な顔に、ゆずるは小さくため息をついた。

「……お前がバカで良かつた」

「へ？」

聞き返した直久にゆずるは、なんでもないと手を振ると、胸元を閉じてからゆつくりと立ち上がつた。

「大丈夫なのか？ その、苦しいとか、どつか痛いとか？」

男が女になつてしまつたのだ。ただ事じやない。あたあたと慌てふためいている直久に、ゆずるは笑う。

「ホント、ばか、お前」

「人が心配してるつーのに、そつこい」と言つた。

そう言つて直久が眉を歪ませた時、さあーっと風がどこからともなく吹き抜けていった。

「風通いか」

直久から目を逸らし、どこか空を見上げると、見えない相手と話を始めるゆずる。

「やうが、分かつた」

「どうしたつて？」

その相手との会話が終わるのを見計らつて直久が尋ねると、ゆずるはホッとしたよつた笑顔を見せた。

「莉恵ちゃんが見つかったらしい。今、先見がここに連れてくる」

「莉恵ちゃんが？ そつか」

ゆずるの式神たちが見つけてくれたらしい。直久もホッと息をついた。

しばらく待つていると、酒の臭いと共に空を浮いた子どもの姿が一人の前に現れた。

「「」苦労」

一匹の式神にねぎらいの言葉をかけると、ゆずるは両腕を差し出して、莉恵の身体を受け止めた。

トサツ、と柔らかな音を立てて莉恵は、ゆずるの腕の中に収まる。

「莉恵ちゃん」

穏やかな声で名前を呼ぶと、幼い少女は涙で濡れた顔をゆづくりと上げた。そして、ゆずるの顔を確認すると、驚いたように口を開いた。

「優香ちゃんのお兄さま？」

「そうだよ。大丈夫？ ケガはない？」

ゆずるは莉恵を腕から下ろすと、田線が合つよつて膝をついた。

莉恵は首を振つた。

「りえのこと、助けに来てくれたの？」

「そうだよ。遅くなつてごめんね。可哀想に、怖い思いをしたんだね」

次々に溢れ出でくる涙をやうと拭いてやると、ゆずるは莉恵を安心させようと抱き寄せた。

「もう大丈夫だから」

今度は頭を縦に振つて、莉恵はゆずるの肩に額を押しつけ、ひし

つとしがみついてきた。

ねずるはその背中を軽く叩きながら、直久を見上げる。

「掃除用具箱に隠れていたらしい。何かに追われていた様子だったと風通りが言つていた」

「何かつて？」

「おそらく、夢魔だ」

直久の脳裏に、あのピエロの笑いが浮かぶ。白い顔に黄色い歯を剥き出しにして、甲高い声で笑うのだ。

思い出すだけでも、ぞつとする。

笑顔のままで斧を振り回す姿。おどけた様子で、ふぞけた口調で殺氣を振りまく。

もう一度と会いたくない。

「ピエロに見つかる前に、ひとつと夢から逃げよ!」

「そうだな」

ねずるも同じ思いなのか、莉恵を片手で抱き締めながら、もう一方の手を直久に差し出した。

じやつ。

不意に、何かが空から落つこちて來た。どす黒い塊。それが何かと目を向けると、猫の死体だと分かった。

ねずるは慌てて莉恵の目を塞いだが、遅かったようで、空気が避けるような悲鳴が上がった。

ピエロからか、笑い声が聞こえてきた。あのピエロの笑い声だ。パンと名乗ったピエロの。

「ねこふんじやつた。ねこふんじやつた。ふふつ。ほりほり、見てじらん。お空に飛んじやつた猫が降りてきたよ。でもね、勢いよく降りてきたものだから、ぶつぶれちゃつた。おかしいね。ペ

ツタン口だよ。おもしろいね。田ん玉飛び出しちゃってるよ」  
パノンの言う通り、血塗れになつた猫は頭が砕け、田玉が飛び出し、腹が裂け、内蔵がはみ出でていた。

ゆずるは猫から目を背け、空に向かつて怒鳴つた。

「どこにいる？ 出でこい！」

ゴボゴボと水音がした。何かと思い音の方を振り返る。プールの方だ。

プールの中を覗き込むと、ずっと下の方にピエロが沈んでいて、じつとこちらを見上げていた。

にやにや、とピエロが笑つた。その笑顔を崩さないまま、ピエロの体がすう一つと浮上する。

大きな水音をたてながら、ピエロは水から姿を現し、そのまま水面の数センチ上で体を浮かした。

水の中にいたと言つのに、少しも衣類を濡らしていないかった。ゆずるは舌打ちすると、莉恵を庇つようにパノンと対峙する。

「確かに、お前、俺の肉が食いたいだの言つていたな。あいにく、お前に食わせられるような無駄な肉はない。この子の夢から、すぐに出て行け！」

そう言つと、ゆずるは先見と風通りを呼ぶ。ほぼ同時に、激しく風が吹き荒れた。

これを『かまいたち』とも言つのだらうか？ パノンの肌がスッパリ切り裂かれた。

だが、痛みを感じていないうらしく、ニタニタ笑い、大きく腕を振り上げた。

右から左へ、何かに指示を与えているようだつた。それに気付いた時、猫の頭がゆずる田掛けて飛んできた。

直久は慌ててゆずるの前に飛び出す。猫の頭はグワツと口を大きく開けて、直久の腕に噛みついた。

「痛つ」

「直久！」

直久の腕から引き離そつと、ゆづるが猫の頭を掴むと、瞼のない猫の瞳がギロリとゆづるを睨み上げた。

血走った目に一瞬怯むと、その間に猫は、ガブリガブリと直久の腕を噛み直した。

ポタポタと直久の腕から血が滴る。

「こいつ！」

今度は力一杯引き剥がしにかかると、猫は散々抵抗したあげくにやつと剥がれ落ち、地面に「ゴロ」「ゴロ」と転がつた。すかさず、直久はその頭を遠くに蹴り飛ばした。

「大丈夫か？」

「お前こそ」

直久に言われて手の平を見ると、猫の牙に裂かれたのだろう、小さな傷がいくつも付いていて、血が滲んでいた。

「俺は、大したこと無い」

ゆづるがそう答えると、パノンがケラケラ笑う。

「そうだよね、全然大したこと無いよね。もつと痛くならなきや。苦しまなきや」

ほおら、ヒパノンは斧を振り上げた。ゆづるは両手を広げる。

「火刈り、炎を！ 風通り、風をあの腐れピエロへ！」

声を張り上げると、ゆづるの手の平から炎が現れ、風が吹き荒れ、熱風となつてパノンを襲う。

パノンが放つた斧は熱風を切り裂き、ゆづるの足下に突き刺さつた。

「相殺？」

いや、向こうの方が少しばかり力が上だ。直久は猫に噛まれた傷口を押さえながら、呻いた。

勝てない。逃げることも難しいだろう。

「火刈り、炎を！」

再び、ゆづるが炎を放つ。

「先見、風通り、行け！」

巨大な火の玉と、それを取り巻く熱風が刃のようにペペロ口を切り裂き、その切り口から肌を燃やしていく。

異様な物が焦げる臭いが辺りに漂つた。だが、ゆずるの攻撃はパノンの笑い声を止めることさえできなかつた。

「次は2本いつぺんいくよ」

ケラケラ笑つて両手に一本ずつ斧を振り上げる。

「ほおら、受け取れ！」

パノンの手から放たれた2本の斧は、回転しながらゆずるの元へ飛んでいく。

「ゆずるつ」

駆け寄つて、身を挺して庇つてやりたかつたが、直久の体は思うように動かなかつた。

地面から生えた何本もの腕が直久をつかみ取つて、その動きを封じていたのだ。

「くそつ」

だめだつ、と目を閉じた時、白い影が直久の脇を擦り抜け、ゆづるの元へ駆けていった。

「ん？」

そつと目を開くと、斧がゆずるの両脇に突き刺さつていた。唖然とするゆずるの目と目が合つ。

「雲居が、雲居が助けてくれた」

「雲居が？」

どうして数の式神が？

直久が首を傾げている間に、ゆずるは雲居と言葉を交わし、大きく頷くと、礼を述べた。

「お前がケガをしたことで、数が、夢魔と俺たちが接触したことには気が付いたんだ。それで雲居を寄こしてくれたんだ」

「なある」

腕の傷を眺めて直久も頷く。

依然として血が止まる様子はない。ボタボタと流れ続いている。

「これだけの傷を負ったのだ。数久もただ事じやないと気付いてくれたのだろう。

先見。一斉攻撃だ

「君がそんなにたくさんおともだちを呼ぶのなら、僕だって呼んでやる」

風から逃げまどいながら、指笛を吹く。すると、プールの底から人形たちが這い上がってきた。

直久はクスクスという笑い声に自分の足下を見た  
自分の体を戒めていた地面から生えた手がニユルリと長く伸び、

「捕まえた。捕まえた。絶対に離さないんだから」

だ。この夢では何度も聞かされている『ねこふんじゃつた』だ。ぐうそ。もう耳ダコだ。

引き離そうと人形の体を押しやるが、人形はベッタリ直久にくつ  
ついて離れない。それどころか、ますますしつくしがみついてくる。

ゆずるの方もプールから這い上がってきた人形にジリジリと問合  
いを詰められている。ゆずるの助けは期待できないと分かつた直久  
は、両手を組んで高く振り上げた。

それを首の付け根に打ちつける。人形が怯んで力を弱めた隙に蹴り飛ばす。人形は高く舞い上がり、地面に転がつた。仰向けに転がつた人形の顔がみるみるうちに猫の顔になつていく。

「アーティストのためのアート」

「猫  
？」

滋くように言つた直久の言葉を聞き取つてゆづるは聞き返した。

なんて  
猫

卷之三

とはかく人形たるの上体は獰らしいと判断したが、見るは呼ぶ。

猿はは力た  
猿を退し抜テ」

一犬が姿を隠す。

茶色といつより

り濃い茶色で、長く毛を全身に生やしていく。

直久にも聞こえる声で吠える。

ビンと三角にとんがつた耳。鋭い牙。本人が言うように、狼にも見えなくない。

ゆするは額を抑えた。

卷之三

ヘレニズム

先見はガバツと口を開いて直久にしがみついていた人形を追い払う。ゆづる二重ハ寄つてきていい人形ら皇ハムう。

思つた通り正体は猫だつたらしく、先見が齎すと、猫の姿になつ

て一田散に逃げていった。おまねせはに逃ごてて、おまねせはに回を直つて、睨み上げた。

「お前の“おともだち”とやらは、お前を置いて逃げていつたぞ」

ゆする瞳を真っ直ぐに受け止めて、パノンは泣き真似をする。

一代わりに君が“おともだち”になってくれるかい?」

「断る！」

ゆずるは両手をパノンに向けた。

「先見、風通い、火刈り、雲居、行け！」

ゆずるの命を受けて先見はパノンに向かつて駆け出す。しだいに

狼の姿が空氣に溶けていき、赤い光となってヒエロを襲つた。

同時に田の景が二口を打つ。熱風が吐き荒れる。川の悪鳴が大気を震えさせた。

その口からどす黒い液が流れ出た。

「ぐわああああああああ～～～～～つ」

されば、耳を塞ぎたくなるほどに醜い悲鳴だった。しばらくして熱風が治まり、黒い煙に包まれたピヒロが姿を現した。みんなとしながらも、それでもまだ空に浮いていた。

トム・クルーズへ54-1

ハノンは最後の力を振り絞って斧を振り上げた。斧は必ずるの足下よりも数メートル手前で転がった。

だが、ゆづるや直久の目を逸らし、逃げるだけの時間を稼ぐのに十分だった。

パノンは片手をぐるりと振り回すと、空間を歪ませた。

逃げる気か！」

「残念だけど、君の肉は諦めるよ。また今度遊ぼうね、九堂家の坊ちゃん」

顔を苦痛に歪ませながらも、パノンはケラケラ笑つて手を振つた。

「待て！」  
彦を苦痛は耐えながらも、ハンジはケニアにて手を振った。  
ゆずるが何かをする前に、パノンはせりあと並んだ空間の中に体を滑り込ませる。

とたん、夜空が青空に変わった。悪夢が終わったのだ。  
逃げたのか？」

「ああ」

「あと少しで倒せたのに……」

「いや、それは分からぬ。あいつは全力を出していなかつた気がする」

「マジでぇ？」

信じられないと聞き返した直久に、ゆずるは肩をすくめる。

「確かにことは、分からない」「

そして、見えない相手を振り返った。

「4人とも、苦労。戻つていい。雲居、一足先に戻つて数に礼を言つてくれ。俺たちもすぐに戻ると伝えて欲しい」

「あーっと風が吹き抜けた。

見送るようになに、しばらく何もない空間を見つめていたゆずるが振り返ると、直久はホツと息を吐き出した。やつと夢から出られるのだ。

ゆずるは莉恵の前に膝を着くと、その肩に両手を乗せた。田線を合わせる。

「ああ、莉恵ちゃん。起きる時間だよ」

「起きる?」「

「君は今、眠つて居るんだ。」「」は夢の中なんだよ

「夢?」「

「そう」「

ゆずるは、直久に振り向くと手を差し出した。直久はその手を取つた。

「田を開いて。ああ、

ゆずるは莉恵の額にもう一方の手を置いて、ゆっくりと瞼を閉じる。

澄んだ声が流れるように聞こえてきて、それは徐々に小さくなつて、やがて聞こえなくなつていった。

気が付くと、田の前に必ずるの顔がドアップにあって、一気に田が覚めた。

押さえつけられているかのように、体が重い。動かないのだ。

「直ちゃん、気が付いたの？」

かす

うわー、うわー、なんか、すげえー久しぶりに数の声を聞いた  
気がするう。

う、すげえー、すげえー、会いたかたなう。  
尻尾があつたら絶対振つてるつて！

すっげえー嬉しい。帰ってきた！ってカンジ。

すぐにでも数久に飛び付いて、抱き付きたいたのに、直久の体はピ

クリとも動かない。  
なんなんだよ、いつたい！

動け、動け、と念じていねと、お父一つとあるの瞼が開いた。

「あ、ああ、ゆする、手離せ。手！」

繫がつていた手が離れると、直久の体は自由になる。とたん、ガ

「数うう」一  
バツと起きあがり、  
数久に飛び付く。

「な、直ちゃん」

困ったように顔を見せたが、兄の体を抱き留めて数久はホッと息を吐いた。

「直ちゃん、お帰り。よかつた、無事で」を呟いた

「数う」

だが、すぐに直久は数久の腕に傷を見つける。萌葱色の着物が血で赤く染まっているのだ。嫌でも目に付く。

「数、どこをケガしたんだ？」

青ざめて詰め寄ると、後頭部をパコッと叩かれた。

「ケガしたのは、あんたの方でしょ」

「り、り、りんかあ！」

何事かと後ろを振り返ると、双子たちの姉 鈴加が腕を組んで佇んでいた。

「なんで、鈴加がここに？」

「莉恵ちゃんの家の御祓いが済んだ報告に来て貰つたんだよ。莉恵ちゃん、もう大丈夫だからね」

数久は莉恵にニッコリ微笑んだ。莉恵はパツチリと大きな目を開けて大きく頷く。

それを見て、優香もホツとしたように笑つて、莉恵の手を握つた。

「りえちゃん、よかつたね」

「ゆうかちゃん。りえ、すごく怖い夢、見てたの」

「もう大丈夫だよ。りえちゃん、りえちゃんのパパとママ、あつちの部屋で待つているよ」

「ホント？」

「うん、行こ」

優香が莉恵の身体を支えるようにして、二人はパタパタと部屋を出ていった。

その後ろ姿を見送つて、ゆずるは柔らかく微笑んだ。鈴加と、その後ろにいる貴樹に振り向く。

「鈴加さん、貴樹さん、お手数をおかけしました。お疲れさまです

「ゆずる君これ、お疲れさま。いつたい何があったの？ びしょ濡れよ」

鈴加に指摘された通り、ゆずるも直久も全身びしょ濡れだった。ずつしりと紫紺の着物を摘み上げると、ゆずるは眉を寄せた。

「今、お風呂を涌かしているわ。すぐに入つてらっしゃい」「はい」

ゆずるは鈴加の言葉に頷くと、『氣怠そうに立ち上がり、部屋から出ていった。その姿を見送りながら、直久は首を傾げる。

夢の中では、ゆずるも自分と同じ制服に着替えたはずなのに、現実世界ではまた狩衣を着ていた。

やはり、夢は夢。夢で起きたことは現実とは異なるのだ。そう、納得する。

その証拠に今の今まで痛いと思つていた傷も、目が覚めたとたんに痛くなくなつていて。

腕を捲つてみると、傷などまったく無かつた。

「俺、ケガなんかしてないみたい」

「直ちゃんにとつて、夢だつたからね」

数久は苦笑して、直久の額に触れる。何かをふき取るかのように数回そこを拭うと、数久の傷もみるみるうちに消えて無くなつていった。

「夢の中でケガをすると、その時は痛いって思つちやうんだけど、目が覚めると、やっぱりそれは夢で、どこもケガなんかしていないし、痛くもないんだ。けど、僕にとつてケガは現実で、直ちゃんの夢が覚めてもまだ痛いんだ。術を解くまではね。術を解いてしまえば、元々は直ちゃんが負つたケガ、僕はどこも傷付いてはいな

い」

ほらね、と数久は自分の腕を見せて笑つた。生白く、きれいな腕を見て、直久も笑う。

「直ちゃんと繋がつて、いよいよと思つて、直ちゃんがケガをすれば僕も同じケガを負うように術をかけたら、ひどい目にあつたよ。ある程度は覚悟していただけど、想像以上だった

「悪い」

「直ちゃん、むちゃし過ぎ」

「けど、おかげで夢魔と対決してんの、分かつただろ?」

「僕の雲居は役に立つた?」

「すっげえー、大活躍。けど、夢魔には逃げられちまつた

「逃げられた？」

双子の会話を黙つて聞いていた貴樹が、怪訝そうに顔をしかめた。

「そいつは、いったいどんな夢魔だつたんだ？」

「ピエロの格好したふざけた奴さ」

「ピエロ？」

「パノンって名乗つていた」

「パノン……」

顎を軽く掴んで黙り込んだ貴樹の袖を、鈴加が引っ張る。

「なんか知ってるの？ 一人で考え込まないでよ」

「どこかで聞いたことがあると思って……。いや、聞いたんじゃないな。読んだんだ」

「読んだ？」

「確かに、誰かの日記だつたはず」

「日記？」

姉弟3人の声が綺麗にハモつた。

「あんたが本を読むのを趣味としているのは知つていたけど、他人の日記まで読んじやう人だとは知らなかつたわ」

「人聞きの悪い言い方をするなよ。日記と言つても、100年近く昔の日記だ。記録みたいなものだろ？ 確か、九堂家の蔵で見つけたんだ。何年も前のことで記憶に自信はないけど」

「蔵でえ？ どこにあつた物か分からなくなると、すぐ蔵にあつたことにしちゃうんだから」

そう言って肩をすくめた鈴加を横目に、数久は貴樹に確認するようにはき返す。

「100年前の日記に書かれていたつてことは、その夢魔は100年前にも姿を現したつてことですよね？」

「そういうことになるな」

「そういやー、あいつ、九堂家の者の肉を食つとか何とか言つていたぜ」

「肉？ もしかして、ゆずるのことを食べようとしていたの？」

「えー、やつなの？ やつだあ～。何ソレー！ じゃあ、莉恵ちゃんは団で、本命はゆする君だったの？ でも、なんで、ゆする君を食べたいの？」

「なんでも、食えば強くなれるとか何とか」

「そんな三藏法師じやあるまー」

「なんで三藏法師？」

首を傾げた直久に数久が口を開いた。

「徳の高いお坊さんの血肉を喰らうと永遠の命を得られるとか、強くなれるとか、そういう話が『西遊記』の中で出てへるんだよ」

「へー

けど、ゆするは坊やんじやないわけだし、食ひたつて仕方がないじゃん。

やつ思つてこると、貴樹が、とにかく、と言つて襖を開けた。暖かい風が部屋の中を駆けめぐる。

「俺はもう一度その日記を探してみよつと黙ひ。倒せたのなつともかく、逃げられたのなら問題だ。再び現れるかもしれない」

「そうね、私も手伝つ」

「邪魔はしないでくれよ」

「しないわよつ。手伝つのー」

貴樹の後に続いて鈴加も部屋から出てこいく。数久と一人つきりで取り残されて、直久は足を投げ出して後ろに倒れ込んだ。全身が重たく、急かつた。

「びしょ濡れの格好で寝なこでよ。畳が濡れる。つて、もう濡れて、ひどい状態だけど」

「数は俺より畳の心配をするんだあ～」

「だあつて、畳つて汚れると見苦しいじやん

「……」

「あと、直ちゃんの制服、濡れちゃつたね。明日も学校あるの。今さうに頼んでクニー

「じめりぐやジージ登校するから良こよ。母さんで頼んでクニー

どうしようか？」

「あと、直ちゃんの制服、濡れちゃつたね。明日も学校あるの。

今さうに頼んでクニー

ングに出して貰う。つーか、制服より、俺の心配は？ 風邪ひかな  
いようにネ、とか、ないわけ？」

「直ちゃんが風邪ひくわけないじやん

「……」

あ、なんか、イジケてきた。

重たい体を起こして、よたよたと立ち上ると襖に手をかける。

「どこ行くの？」

「俺も風呂入つてくる。濡れてて気持ちわりー」

「そう」

パシャンと襖を閉められて、数久は、はてと氣付く。

「え？ お風呂？」

今、お風呂には、確か。

「ちょ、ちょっと直ちゃん、待つ……」

追いかけようと襖を開けて廊下に出たが、もはや、すでに直久の姿はなかつた。

数久はカリカリと頭を引っ搔く。

「ま、いいか。なんか、もう、僕も疲れちゃつたし  
と、その場にしゃがみ込んだ。

春の風が吹き込んでくる廊下を直久は、重たい足を引きずりながら風呂場に向かつた。

どこからか白い花びらが舞い込んで、直久の目の前でくるりと踊つた。

庭にある桜の木からだろうか。桜を怖がっていたゆづるを思い出として、一人笑う。

どこが怖いんだ？ やつぱりキレイじゃないか。

やたら広い九堂家の庭を眺め、桜の木を仰ぐ。

幼いゆずるが襲われたという魔物は、あの桜の木に取り憑いていた魔物だつたのだろうか？

九堂家の回りには特別な結界が張つてあつて、低級な魔物は入り込めないと言つていたから、あの桜の木ではないのかもしない。

そんなことを考えながらも、直久は脱衣所にたどり着いた。

中に入人の気配を感じたが、どうせ、ゆずるだらうと思つて扉を開けた。

ゆずるは普段、他人に自分の肌を見せるのをひどく嫌がつていたが、今は緊急事態だ。我慢して貰おう。

春とは言え、まだ肌に寒い。

さすがの直久だつて、いつまでも濡れたままでは風邪をひきかねないのだ。

同じ男なんだし、一緒に風呂くらいい……。

そう、直久は思つた。

「ゆずる、わりー、一緒にさせてくれ」  
ガチャリ。扉が開く。

「え？」

「ん？」

驚いたゆずるの瞳と目が合つ。

その瞳はしだいに恐れの色を露わにして、次には怒りの色を、そして、ひどく悲しそうな色を示した。

一方直久は、ゆずるの瞳から顔全体、首、肩、そして、胸、腰……と目線を徐々に下へ、下へと下げて、再びゆずるの顔を見た。

「嘘だろ？ なんで、お前……」

ゆずるは、今まさに脱衣所から風呂場に移動しようとしていたところで、一糸纏わぬ姿をしていた。

すぐに我に返り、側に置いてあつたタオルで身体を隠すが、すべてが直久の目にバツチリと焼き付いてしまつた後だつた。

膨らんだ胸。男ならあるはずのものがない身体。

「お前、女？ だつて、あれは夢だつて……」

「とにかく、ここから出て行けよ」

静かに、低く、ゆずるが言い放つた。

「え？ あ、ああ。『ごめん』

頭の中が真っ白になってしまい、なんて言つたらいいのか分からなかつた。

とりあえず謝つて直久は脱衣所の扉を閉めた。それから、一度大きく深呼吸をすると、深く息を吸い込んだ。

わあわあああああ～つと叫びながら、やつて来た廊下を逆走する。ど、ど、ど、どうこういつちやあ～つ！ ゆずるが、ゆずるが女だつたなんて！

数久でも、鈴加でもいいから、詰め寄つてきちんと聞いてみたかつた。

ゆずるはいつから女だつたのか？と。お前は知つていたのか？本当に、本当に、ゆずるは女なのか？と、一刻も早く聞きたかった。

さあ――つと、風が直久の脇を吹き抜けていった。

はつとして直久は立ち止まる。風の吹いてきた方を振り返ると、例の桜の木がじつと佇んでいた。

直久を見守るかのように静かにそこには立つていて、慰めるかのように花びらを散らす。

濡れた衣服に花びらが何枚も何枚もペタペタとくつついた。

直久は足を投げ足すようにして、その場に腰を下ろした。春風が頭をやさしく撫でていく。

どのくらいそうしていただろう？

名前を呼ぶ声に、直久は我に返つた。見上げると、すぐ傍にゆずるが立つていた。

「あ」

口を開いたものの言葉は何一つ出てこなかつた。

直久は諦めてゆずるの言葉を待つことにした。そんな直久にゆずるはため息をついた。

「俺は男だ」

「けど」

「そうは見えなかつたと顔を上げると、ゆずるは、黙れ、と睨み付けられる。

「男として育てられた。だから、これからも男として生きていく」「育てられたつて？」

「九堂家に必要なのは女子じゃない。後を継ぐことのできる男子だ」

「だからって…！」

「だからって、男として育てられたというのか？ 本当は女なのに？」

何かを言おうとした直久から、ゆずるは手を逸らし、その言葉を封じた。

「お前が俺を男として見られないと言つのなら、もう一度と俺の前に姿を現すな。本家への出入りも禁じる。祭儀にも出席するな」

「なんだよ、それ！」

元から本家への足は遠く、行事にも不参加な直久だが、出るな、禁じる、と言われるのはおもしろくない。

問い合わせようとしてゆずるの方へ手を伸ばす。だが、バシンとその手を叩かれた。

「痛つ」

「触れるな！」

吐き捨てるよう短くせつまつと、ゆずるは直久に背を向けて去つていった。

「どうこうとだよつ、ゆずるー！」

その背中に向かって怒鳴るが、届かないのか、ゆずるは振り向きもしなかつた。

大嫌いなゆずる。

顔も見たくないイトコ。  
話したくないし、声も聞きたくない。

大嫌い。大嫌い。すっげえー、ムカツク。  
そう思っていた。それなのに……。

叩かれた手が痛い。遠ざかっていく背中が苦しい。  
ここ数ヶ月で近付いたと思った一人の距離が、ゆづるが一步、また一步と遠ざかつていくほどに、引き離されていく感じがした。

桜の花びらが舞う。今はもう、それをキレイだとは思えなかつた。

地面を覆い隠すように、自分もその花びらで覆い隠してくれ。そう願つて、直久はその場に転がる。  
なんだか、ひどく身体が重たかつた。もう一度と起きあがれないかもしれない。

そう思いながら、ゆっくりと瞼を閉じた。  
静かな静かな廊下に、桜の花びらが積もつていく音だけが、直久の耳元で響いていた。

【完】

8. ニュースレターメルマガジン、ホタルー（後書き）

『蜜狩り』 (<http://nocode.syosetu.com/n689d/>)へ続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6626d/>

---

春眠

2010年10月8日14時19分発行